小井川遺跡Ⅳ

－新山梨環状道路建設工事に伴う発掘調査報告書－

２００８．３

山梨県教育委員会
山梨県土木部

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第二五六集
小井川遺跡Ⅳ
二〇〇八・三
山梨県教育委員会
山梨県土木部

小井川遺跡Ⅳ

－新山梨環状道路建設工事に伴う発掘調査報告書－

２００８.３

山梨県教育委員会
山梨県土木部

小井川遺跡Ⅳ俯瞰写真（Ⅱ面）

小井川遺跡全景写真（Ⅰ面）

小井川遺跡の概要

小井川遺跡は中央市（旧田富町）布施地区で発見された遺跡です。この遺跡は新山梨環状道路の建設工事に先立って平成15年度から18年度にかけて発掘調査が行われました。平成15年度と16年度の調査では、江戸時代から明治時代のお墓や溝が発見され、平成17年度の調査では、戦国時代の大きな建物の跡が発見されました。この本では、平成18年度に行った発掘調査の成果を報告しています。

○平成18年度の発掘調査で発見された主なもの

Ⅰ面
・溝（江戸時代～現代）
・土坑※（江戸時代）　※土坑【どこう】：人が掘った穴のこと
・洗い場（明治時代～現代）
Ⅱ面
・竪穴住居跡（平安時代）
・木の列（室町時代～江戸時代）

平成18年度の発掘調査では、現在の地表から約1m掘り下げた地点（Ⅰ面）と同じく約2.5m掘り下げた地点（Ⅱ面）から昔の人が生活していた跡が発見されました。

遺跡は、釜無川によって流されてきた砂で覆われていて、Ⅰ面で発見された溝や土坑も砂を掘り込んで作られていました。Ⅱ面の地点でも調査を行った範囲のほとんどが砂で覆われていましたが、東側の一部には平安時代の地表面が残っていて、竪穴住居跡を発見することができました。これまで、遺跡の周辺は、釜無川の洪水などによって、昔の人の生活の跡が全て流されてしまったのではないかと思われていましたが、この発見によって、平安時代には遺跡の周辺にも集落が存在したことが明らかになりました。

また、遺跡の東側には平安時代以降の土も残っていて、この部分からは、南北方向に１列に並んだ木の列が発見されました。この木は、分析の結果、全て同じ種類の木であることがわかりました。同じ種類の木が南北１列に並んでいることから、自然に生えてきたものではなく、人間によって植えられたものと考えられます。また、木の年代を分析したところ、室町時代の後半から江戸時代の初めということがわかりました。遺跡の周辺を描いた江戸時代の地図には、この木の列の位置とほぼ同じ地点に堤防を示す線が引かれています。今回の調査では、木の列のさらに東側の部分を調べることができなかったので、はたしてこの部分が人工的に造られた堤防なのか、川の流れによって自然に造られた堤防なのかを明らかにすることはできませんでしたが、室町時代の後半には木が植えられ、当時の釜無川との境界線となっていたことがわかりました。

序

本報告書は、山梨県土木部による新山梨環状道路建設工事に先立って、山梨県埋蔵文化財センターが平成18年度に発掘調査を実施した小井川遺跡の発掘調査報告書です。

本遺跡の所在する中央市布施地区は甲府盆地の南部、釜無川と笛吹側の合流点に位置し、隣接する昭和町とともに県下で最も平坦部の多い低地平野部にあたります。この地域は良質な水にも恵まれた農業が盛んな土地であります。近年は、甲府圏域のベッドタウンとして宅地開発等も進み、人口が急増している地域でもあります。

本遺跡は、旧田富町（現中央市）の遺跡分布調査によってその存在が知られていましたが、この度の新道路建設に伴う試掘調査によって、さらに遺跡が東側に広がって存在することが確認されました。このため、平成15年度から平成18年度までの4年をかけて発掘調査を実施してきました。その結果、近世・近代の墓地や溝が発見され、さらに平成17年度の調査では、中世の荘園・布施荘の存在を実証する遺物や戦国時代の大型建物跡が発見されました。

本書で報告する平成18年度の調査では、砂礫上に掘られた近世・近代の溝や土坑が発見され、土器や陶磁器が出土しました。釜無川の旧流路と思われる砂礫は調査区のほぼ全域において表土下に厚く堆積していたため、近世以前の遺構を発見することは困難ではないかと思われましたが、地表から2.5mほど掘り下げた地点で平安時代の竪穴住居跡を発見することができました。この竪穴住居跡のカマドには、補強材として木製の杭が使われていたことがわかり、全国的にもめずらしい発見となりました。

これまで、小井川遺跡の周辺に関しては、低地における度重なる水害のため、遺跡を裏付けるような資料もほとんどなく、歴史が封印されてきた地域とされてきましたが、今回の調査を含め、地中深く埋もれた地域の歴史が埋蔵文化財の発見とともにより鮮明に描き出されてきました。今回の調査が文化財に対する認識と理解を深めるために、また教育や学術研究の分野において幅広く御活用いただければ幸甚であります。

末筆ではありますが、本調査におきまして様々な御協力を賜りました関係機関各位、並びに発掘調査・整理作業に従事された方々に厚くお礼を申し上げます。

２００８年３月

山梨県埋蔵文化財センター

所長　末木　健

例　言

1　本書は、山梨県中央市布施地内に所在する小井川遺跡（平成18年度調査分）の発掘調査報告書である。
2　本書は、新山梨環状道路建設に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査を山梨県教育委員会が県土木部より委託を受け、山梨県埋蔵文化財センターが実施した。
3　本書の執筆及び編集は当センターの依田幸浩・猪股一弘が行った。第4章の自然化学分析についてはパリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、その報告書から一部転載した。また第５章の放射性炭素年代測定は、株式会社加速器分析研究所に委託し、その報告書から一部転載した。
4　遺跡における遺構等の写真及び遺物の写真は依田・猪股が撮影した。なお、遺跡の航空写真撮影については株式会社こうそくに委託した。
5　杭の保存処理については、㈱帝京大学山梨文化財研究所に委託した。
6　測量基準点については、昭和測量株式会社に委託した。
7　本報告書に関わる記録図面、写真、出土遺物等は山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。
8　発掘調査や整理作業にあたり以下の諸氏・諸機関から御教示と御協力を賜った。記して謝意を表する。（順不同、敬称略）

今村直樹　田中大輔　内藤和久　畑大介　中央市教育委員会　中央市文化財審議会

凡　例

1　遺構・遺物図面の縮尺は図中に示す。
2　調査区は国土座標軸によって設定しており、全体図中におけるグリッド名と別に付した数値は座標軸の数値である。よって南北のグリッド線および図中の方位印は真北を指す。
3　遺構挿図中に用いたスクリーントーンは■が被熱により焼土化した部分、▒が炭化物の分布する部分、▨が旧河川の砂礫が堆積していた部分を示す。
4　遺構挿図中のドットマークの番号は、遺物挿図の番号と対応する。
5　遺物挿図中、土器類の断面図において黒く塗りつぶしてあるものは須恵器、Ⅱ面出土の陶器（灰釉陶器）の断面は網点とする。
6　遺物挿図中、■が煤付着・炭化部分、▒が釉薬の部分を示す。
7　遺構断面図中のレベルポイントに記した数値は標高（単位m）を示す。
8　遺物観察表中の括弧内数値は推定値である。

目　次

序文
例言・凡例
第１章　調査の経緯と概要 …… 1
　第１節　調査に至る経緯
　第２節　調査の方法
　第３節　発掘調査の組織

第２章　遺跡の自然環境と歴史的環境 …… 2
　第１節　自然的環境
　第２節　歴史的環境

第３章　発掘調査の成果 …… 5
　第１節　遺跡の概要と基本層序
　第２節　発見された遺構・遺物

第４章　自然化学分析 …… 7

第５章　放射性炭素年代測定 …… 9

第６章　まとめ …… 9

遺構挿図

遺物挿図

遺物観察表

写真図版

第１章　調査の経緯と概要

第１節　調査に至る経緯

今回の発掘調査にかかわる地域は山梨県土木部による新環状道路建設の発表後、山梨県土木部と山梨県教育委員会学術文化財課が遺跡保護の目的による協議を行い、道路建設に先立ち山梨県埋蔵文化財センターが遺跡確認調査を実施することとなった。

遺跡確認を目的とした試掘調査は平成14年10月22日から11月７日の間に実施された。対象面積は、道路建設予定地内の15,300㎡で、41本のトレンチを設定して遺跡の確認を行った。試掘調査の結果、遺構・遺物の確認された地点については、平成15年度から本格的な発掘調査を実施することとなった。平成15年度と16年度の発掘調査では、近世・近代の墓地や溝が発見され、平成17年度には中世の布施荘の存在を示唆する関連遺物と戦国時代の大型建物跡が検出された。本書で報告する地点からは、試掘調査において杭列（調査の結果、立木の列だった）と平安時代の遺物が発見されたため、平成18年度に本格的な発掘調査を実施することとなった。

・法的手続き等の主な経緯

平成18年５月19日　文化財保護法99条に基づく発掘通知を山梨県教育委員会教育長に提出
（教埋文第100号）

平成18年８月25日　遺失物法に基づく埋蔵文化財発見通知を南甲府署に提出（教埋文第385号）

平成18年９月８日　発掘調査の終了報告を山梨県教育委員会教育長に提出（教埋文第417号）

平成19年３月15日　発掘調査実績報告書を山梨県教育委員会教育長に提出（教埋文第900号）

平成20年３月末　実績報告書を山梨県教育委員会教育長に提出（予定）

第２節　調査の方法

調査区域は、新環状道路建設工事が施工される、幅約40m、長さ35mの範囲を対象とした。調査に先立ち、調査区全体をアルミ製の塀で囲い、出水・壁面崩落防止のため調査区の周囲に長さ７mの鋼矢板を打ち込み、安全面に配慮した。調査用のプレハブ・機材庫設置や駐車場を確保するために、遺構の存在が想定されていた調査区域内の東側に長さ20m、幅1.5mほどのトレンチを２本、西側に長さ２～３m、幅２m程のトレンチを３本設定し、遺構が確認できなかった西側を除いた部分を本調査区とした。調査は、初めに重機により表土を１mほど除去した後、移植ゴテや竹箆等によりⅠ面となる近世および近代の遺構の掘削・調査を行った。Ⅰ面の調査終了後、さらに重機で２mほど掘り下げ、移植ゴテや竹箆等を用いてⅡ面の平安時代の住居跡やシルト堆積部分の掘削・調査を行った。

遺構配置図・平面図等の記録類は、国家座標に基づいて５m方眼のグリッドを調査区全体に設け、グリッド杭を基準とする平板測量により実測し、遺物については、各遺構およびグリッド単位で平面・垂直測量により取り上げた。各グリッド杭の名称は、前年度までの調査を継承し、東西方向に東から１・２・３･･･、南北方向に北からＡ・Ｂ・Ｃ･･･の順となる。

第３節　発掘調査の組織

調査主体　　山梨県教育委員会

調査機関　　山梨県埋蔵文化財センター

調査担当者　主査文化財主事 猪股一弘　主任文化財主事 依田幸浩

発掘作業員　石井弘文　今村貞夫　神沢正孝　久保建司　河野逸広　斉藤重信　土井みさほ　早川みどり
保坂秋蘭　望月忠
整理作業員　小池美保子　土井みさほ　早川みどり　保坂秋蘭

第２章　遺跡の立地と環境

第１節　自然的環境

本遺跡の所在する中央市は、名前の通り山梨県のほぼ中央に位置し、平成18年２月20日に旧玉穂町、旧田富町、旧豊富村の合併により誕生した。地形的には、釜無川と笛吹川により形成された沖積平野の地域と御坂山系からなる地域との大きく二つに分けることができる。本遺跡のある旧田富町内は、西側を北から南に向かって流れる釜無川と、南部を東から西に向かって流れる笛吹川の土砂や礫の堆積作用によってできた沖積地で、いわゆる氾濫原の地帯である。また隣接する昭和町などとともに県下で最も平坦な地域でもある。

さらにこの付近の細かい地形分析については、微地形と旧河道の配置に注目した、次のような高木勇夫氏の研究成果がある。釜無川扇状地においては、北半部（甲斐市竜王など）と南半部（旧田富町・旧玉穂町など）に分けられる。北半部は微高地の分布密度が高く、その方向も南東に伸びているが、南半部では分布密度は低く、その方向も南北から南西方向を示す。また旧河道においても、北半部では分布が多く、旧河道が網の目のように発達した「網状流跡」が見られる。一方、南半部では分布は少なく、「網状流跡」が見られない。南半部の微高地は、釜無川、荒川、笛吹川の溢流堆積によって形成された自然堤防であり、その背後の低地は氾濫盆状地であるとしている。また、釜無川の堆積が活発に行われるため、笛吹川の下流部を閉塞した状態としている。（高木勇夫1989『条理地域の自然環境』古今書院）

南半部に属する本遺跡付近に関しては、釜無川の氾濫の影響を強く受けた微高地で、地層の多くは河床堆積からなり、主に砂礫や細土で構成されている。地下水位は比較的高く、掘り抜き井戸の自噴現象がみられる。地下水は、動水勾配に応じて、釜無・笛吹両河川の合流点方向に流動し、かなり圧力の高い自噴帯となっていて、被圧地下水はほとんど自噴性をもっていると考える（田富町誌編集委員会1981『田富町誌』）。遺跡の標高は、252mで身延線小井川駅より西へ約500mに位置する。

第２節　歴史的環境

釜無川と笛吹川の二大河川の合流点に位置する本遺跡付近は、度重なる河川氾濫の水害によって、遺跡を裏付けるような建物、古文書がほとんどないことや生活する立地条件・環境が整わないため、以前から遺跡は希薄であり歴史的にも空白地域であると考えられてきた。しかし、旧玉穂・旧田富町教育委員会でそれぞれに実施された町内遺跡分布調査で、幾つかの遺跡埋蔵地が発見されたことや試掘・発掘調査により歴史的空白が徐々に埋まりつつある。

本遺跡付近で最も古い遺跡は、分布調査で確認された宝珠院周辺の沖村遺跡(1)で、外面に赤色顔料による赤彩が施され、弥生時代後期の高坏形土器の坏部に類似している薄手の土師器の小片が採集されている。また、本遺跡より北東方向へ約１km上三条に位置する三宮可遺跡(2)では弥生時代後期と見られる土器片が確認されている。また、釜無川を挟んで南アルプス市（旧甲西町）になるが、向河原遺跡では、弥生時代中期後半の水田跡や壺形土器が、大師東丹保遺跡では弥生時代後期の土器片と動・植物遺存体が検出されている。

古墳時代に関わる遺跡は、鍛冶新居集落の北側に位置し、小破片ではあるが、形状・質から古墳時代前期の小形壺の体部に相当する土師器が採集された上手新田遺跡(3)をはじめ、壺形土器の頸部の所産時期が古墳

時代前期と比定できる整理地遺跡(4)、永正寺の境内周辺に位置し、壺あるいは甕形土器の体部破片と推定されている延里遺跡(5)がある。また、平成14年度に、本遺跡より東へ200m付近の試掘調査において、破片ではあるが、6世紀後半の坏2点が発見されている。本遺跡の南東方向約1km、下三条に位置する竹之花遺跡(6)から古墳時代の土器が採集されている他、近隣には古墳時代前期～中期にかけて有力な古墳が築造された曽根丘陵があり、それらの勢力が何らかの形で影響していたのではないかと想像される。

仏教文化の伝来より古墳築造の終焉を迎え、律令制度によって中央と地方との連携が明白になり、国家体制が確立した。全国は、畿内と七道に分けられた。甲斐国は東海道に属し、10世紀に編集された「和名類聚抄」によると、4郡（山梨・八代・巨麻・都留）31郷（里）に分割されたと記載されている。郡には郡司、郷には郷長が置かれ、律令制度下で税の徴収などの仕事を担っていた。本遺跡付近に比定される郡・郷に関しては、①巨麻郡市川郷②巨麻郡川合郷③八代郡沼尾郷④八代郡川合郷などの諸説があるが、現在の地名にその名が残ることなどを考えると①②の説が有力となるが、後述する荘園の問題からすると、①の説が注目されている。いずれにせよ当時と現在の地理的環境の違いなどの影響もあり断定はできないので、今後の更なる研究が期待される。

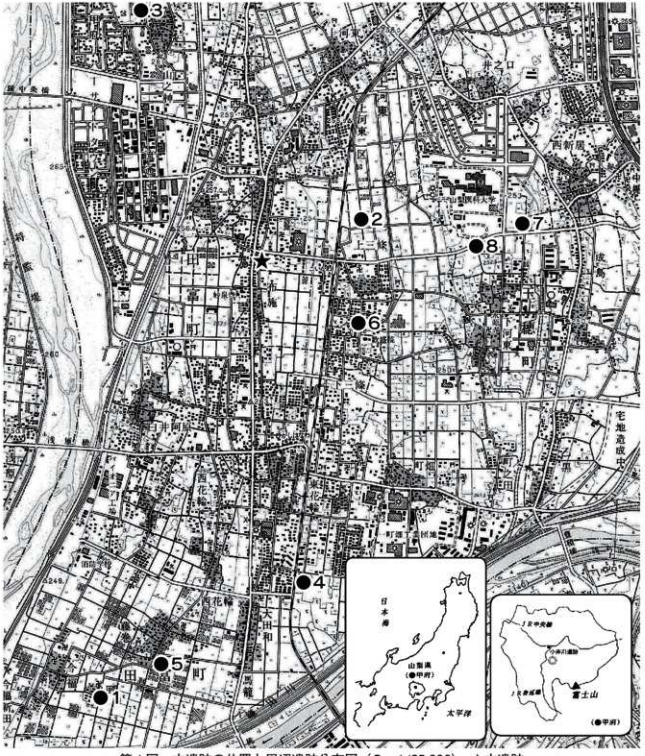
律令制度が崩壊していく中、貴族、社寺などの有力者の大土地私有地化がなされるようになる。これが荘園制である。甲斐国において記録に残っている一番古い荘園は、安和2年（969）の「法勝院領目録」にある「市河荘」の存在が確認されている。この目録には、同荘以外に七ヶ所の所領が記載されている。これらの所領は、安和2年までに数十年経過しているというので、遅くも十世紀初頭には、荘園として機能していたと考えられる。「市河荘」の田地は十三町九段三百十歩あり、「巨麻郡九条四市河里」と記載されているようにほとんどが巨麻郡に所属し、荘園名の起源と共に前述①の郷名の起源とも思われる。また、その位置は条里によって示されている。

「条里制」の発祥は、律令制度下の班田収受のための農地整理で、ある一定の企画に基づいて農民に農地を区画・分配し、その比率により税を負担させる制度である。この条里制地割が河川氾濫地域である本遺跡地域一帯にも存在したと指摘されている。磯貝正義氏は、目録中の「巨麻郡北一条」をかつては一条小山と呼ばれた現在の甲府城跡に、「九条三宮原里」を甲府市宮原町に比定できる可能性を示し（「郡の成立」／『郡司及び采女制度の研究』）、その考えはラインハルト・シェルナー氏によって具体的に地図上に表現された（「土着－初期甲斐源氏の屋形造り」／『甲府市史研究』八号）。この考えによれば、甲府市宮原町の西隣が中央市になるので、少なからず本遺跡地域も関係したこととなるが、更なる検討が求められている。なお、縦線が約6度東偏する条里型地割の存在（須藤賢・谷岡武雄1951「甲斐条里の諸問題」『地理学評論』第24巻4号）や釜無川扇状地端部の湧水線直下での存在（高木勇夫1984『条里制の諸問題Ⅲ』奈良国立文化財研究所）などの諸説もこの地域に関係している。

その他の荘園名も「布施」「小井河」など、古文書において現れている。「布施」については元永2年（1119）の「中右記」には大井荘が布施荘の新荘として扱われた記事があり、布施荘の成立が十一世紀まで遡ると言われている（旧玉穂町誌）。その後、正応二年（1289）の「勘仲記」、嘉元三年（1305）と推定される「摂録渡荘目録」にも布施荘の関連記事が載っている。しかし、これ以降の文献からはその名が消え、地元に伝承だけが残ったと思われる。一方、「小井河」の初見は安元2年（1176）「八条院領目録」で、鳥羽上皇によって創建された案楽寿院の所領の一つとして数えられている。また、布施荘とは対照的に中央の荘園目録には小井河荘の記録が残り、地元にはほとんど伝承が残っていない。これは、「甲斐国志」に地蔵霊験記を引用して、（布施荘）＝（小井河荘）との話を伝えているが、立証するのは難しいものの、可能性は充分にあると考えられている。さらに、旧玉穂町教育委員会が発掘した上窪遺跡1次・2次調査(7)では、平安時代後半から鎌倉時代にかけての水田跡が、平田宮第2遺跡(8)では、水田跡以外に平安時代中頃の集落跡、畑跡が検

出されている。

以上のように平安中期以降の本遺跡地域周辺には、市河荘、布施荘、小井川荘などの荘園が存在して、河川の氾濫はあるものの水田に必要不可欠な灌漑用水には恵まれ、度重なる洪水は肥沃な農地を可能にし、水田開発に必要な人々が生活を営む中で、何らかの形で河川の改修があった後、画期的治水事業である「信玄



第１図　本遺跡の位置と周辺遺跡分布図（S＝1/25,000）　★本遺跡

1　沖村遺跡　2　三宮司遺跡　3　上手新田遺跡　4　整理地遺跡
5　延里遺跡　6　竹之花遺跡　7　上窪遺跡　8　平田宮第２遺跡

堤」の建設に繋がっていったと思われる。

貴族に代わって武士が台頭してくると、甲斐国は甲斐源氏の一族が勢力を拡大しつつ、磐石にするため、それぞれの支配地の地名を姓として、地域に根ざした支配体制を確立していく。特に武田氏は、一族の中でも大きな勢力を持つようになり、やがて甲斐国全体を支配するようになった。本遺跡地域では、武田氏系列の「布施氏」の名が上げられる。布施氏については、「承久記」(1221承久の乱)にその名が現れ、「甲斐国志」には、甲斐守護の武田信成の子布施満春、満春の子頼武、満頼、満頼の子信清等の名が見える。また、甲府市大津町の慈恩寺の開基は満春と伝え、旧田富町布施の本遺跡より北東200mに位置する法星院は頼武の開基と伝承している。慈恩寺、法星院共に開創年代は14～15世紀中としている。遺構・遺物に関しては、本遺跡東側隣接地である16年度調査区(3600㎡)から、中世における布施荘の存在を示唆する関連遺物と戦国時代の大型建物跡が検出されている。特に、五輪塔の一つに銘文「戊の剋　二藤布施兵衛忠光(法名真顔)6□歳入滅」とあり、布施氏の存在とこの地域への影響が明らかになっている。

第3章　発掘調査の成果

第1節　遺跡の概要と基本層序

小井川遺跡は、平成15年度から平成18年度にかけて計4次の発掘調査が実施されてきた(第2図)。調査は新山梨環状道路建設予定地内における調査対象区域の東側から着手し、本書で報告する平成18年度の発掘調査は、一連の発掘調査区域の一番西側にあたる。

遺構・遺物は近世・近代の溝や土坑などを発見したⅠ面(現地表下約1mの地点)と平安時代の竪穴住居跡を発見したⅡ面(現地表下約2.5mの地点)で確認され、同一調査区内において2面の調査を行った。調査区内の表土下はⅡ面までほぼ全体的に砂礫が堆積しており、調査区東壁沿いとⅡ面の北西部でシルトの堆積が見られた。遺構は、Ⅰ面で近世・近代の溝および溝状遺構6条・近世の土坑1基・近代の洗い場1カ所、Ⅱ面で平安時代の竪穴住居跡3軒(内2軒は遺構の位置を確認し、遺構表面の遺物を採取した)を発見した。遺物は、Ⅰ面で近世・近代の土器・陶磁器・土製品・石製品・ガラス製品、Ⅱ面で古墳時代～平安時代の土師器・須恵器・灰釉陶器、中世の土師質土器・陶磁器などが出土した。

基本層序(第3図)

平成18年度に調査を実施した小井川遺跡の土層は、Ⅰ層:耕作土、Ⅱ層:釜無川の洪水や旧流路による砂礫層、Ⅲ層:調査区東壁沿いに堆積するシルト層に大別することができる。

Ⅰ面の遺構はⅡ層の上面から掘り込まれ、Ⅱ－8層内には埋桶の一部が出土した。Ⅱ層は所々に斑鉄の層を挟んだり、砂礫の粒子に差異が認められるものの、調査において確認した地点よりさらに下層に堆積していると考えられる。Ⅲ面のシルト層は調査区東壁に沿って堆積しており、Ⅲ－3・6層は東側から西側に向けて斜めに下っている。Ⅲ－9層は平安時代の遺物包含層で、2面で発見された平安時代の竪穴住居跡はⅢ－9層直下から掘り込まれている。また、Ⅲ－9層の西側部分はⅡ層の砂礫によって剥削されている。

第2節　発見された遺構・遺物

Ⅰ面

1号溝(第4図)

[位置]D・E－35・36、F～J－36グリッド[規模]長さ:南北(約30m)、幅:約1.0～3.4m、深さ:最大

約62cm［検出状況］調査区を南北に走り、さらに調査区外に延びている。中央部分は攪乱により消失している。北側では礫や木片がまとまって出土し、近くには埋桶が2基設置されていた。北端部で二股に分かれている。［出土遺物］遺物は少なく、内耳土器の破片や19世紀代の磁器片、石臼の一部が出土した。［時期］近世

2号溝（第4図）
［位置］G～J－38・39グリッド［規模］長さ：（約4.8m）、幅：（約3m）、深さ：最大約20cm［検出状況］調査区南西端から北西方向に走り、調査区外に延びている。E－40グリッド周辺にあたる北西トレンチ拡張部において溝状遺構が検出されたが、2号溝の延長部分と考えられる。［出土遺物］遺物は、灯明受皿が1点出土した。［時期］近代

3号溝（第4図）
［位置］G－38・39、G・H－35～37グリッド［規模］長さ：約（17.1m）、幅：約0.5～1.1m、深さ：最大約12cm［検出状況］調査区ほぼ中央部を東西に走り、調査区外に延びている。中央付近の北側で洗い場と接しており、洗い場の部材と思われる木片や陶磁器片・ガラス製品の破片などが混入していた。［出土遺物］明治・大正期の陶磁器やガラス製品が出土したが、洗い場からの混入品も含まれる。［時期］近代

4号溝・5号溝（第4図）
［位置］G－35・36グリッド［検出状況］3号溝と同様に東西方向に走っていると思われるが、規模・形状ともに明確では無く遺物も出土しなかった。［時期］不明

6号溝（第4図）
［位置］D・E－35～37グリッド［規模］長さ：（約9.7m）、幅：約50～77cm、深さ：最大約17cm［検出状況］調査区北東端部で1号溝を切って東西方向に走り、E－37グリッドで北方向に曲がり調査区外に延びている。［出土遺物］陶器製の杯が1点出土した。［時期］不明

洗い場（第4図）
［位置］F・G－36・37グリッド［規模］南北約2.5m、東西約1.2m［検出状況］石組みと木枠によって構築されている。北側から南側に移動しながら数回作り替えが行われているようである。［出土遺物］近代から現代にかけての陶磁器片や石製品、プラスチック製品などが出土した。［時期］近代～現代

1号土坑（第4図）
［位置］E－35グリッド［規模］長さ：約2.7m、幅（約1.4m）、深さ：約47cm［検出状況］東側が調査区内の排水用に掘った溝によって失われている。覆土は白色粗砂を大量に含んだ暗褐色土で地山が砂礫のため明確な形状が確認できなかった。［出土遺物］18世紀代の磁器片や内耳土器の破片、泥めんこが出土した。［時期］近世

Ⅱ面
1号住居跡（第7図）
［位置］I－35・36グリッド［規模］調査範囲：南北約1.6m、東西2.7m［壁高］最大約15cm［床面］カマド

前面を中心に広範囲に炭化物が堆積していた。［カマド］住居跡北壁に構築されている。奥壁は住居跡の壁を掘り込まず、火床面も住居跡の床面とほぼ同じ高さにある。両袖と奥壁部を灰色粘土で構築している。両袖内部には木製の杭が打ち込まれていた。［検出状況］調査区の東・南壁付近で検出したため、土砂崩落の恐れがあり、住居跡の一部のみの調査となった。調査区埋め戻しの際に周辺を拡張して範囲確認を行った結果、東側で２号住居跡と重複している状況を確認した。西側の一部は砂礫によって剥削されている。［出土遺物］床面直上から土師器の坏・皿・甕、カマド内からは土師器の甕が出土した。覆土中からは土師器の他、須恵器甕の破片が出土した。カマド袖部の杭は、残存状態の良いもののみ取り上げ・実測し、遺物挿図に掲載した。また１号住居跡上層の砂礫層からは円筒形の大型石製品が出土したが、１号住居跡とは無関係の遺物である。［時期］平安時代（９世紀後半）

２・３号住居跡（第８図）

［位置］Ｈ～Ｊ－34・35グリッド［規模］２号住居跡：南北約４m、東西不明、３号住居跡：不明［検出状況］調査区埋め戻しの際に１号住居跡周辺を拡張し確認した。土砂崩落の危険があったため、範囲の確認と遺物の採取のみを行った。１～３号住居跡が重複しており、２・３号住は東側調査区外に広がる。［出土遺物］土師器坏・皿［時期］平安時代（９世紀後半か）

立木列（第５図）

［位置］Ｄ～Ｊ－35グリッド［検出状況］調査区東壁沿いに堆積したシルト層の斜面上に南北方向に一列に並んでいた。当初は杭列と思われたが、シルト層中に根を張っており、立木であることが確認された。

第４章　自然化学分析

本遺跡の古環境・植物利用について、各種自然化学分析をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、その結果は「パリノ・サーヴェイ株式会社　2006『小井川遺跡にかかる自然化学分析業務委託報告書』」として報告されている。以下は、その一部を抜粋し掲載した。

(1)古環境

堤防或は道路として機能していた可能性が指摘される灰白色シルトと白色砂礫（径２㎜以下）が混じる土層（11層）の上位に堆積した灰褐色シルト（10層・第６図上Ａ部分：土壌試料№１）は、中～下流性河川指標種群を多く含む流水性種が多産することを特徴とするが、これとは生育環境を異にする陸生珪藻も比較的多く産出した。このような複数の生育環境を示す種類が混在する群集は混合群集と呼ばれており、河川の氾濫等によって堆積した一過性堆積物中に良く見られるとされる（堀内ほか，1996）。このことから、本土層は、洪水等によって堆積した氾濫堆積物、或は、これを母材としていると考えられる。

同試料の花粉分析結果では、化石の産出状況は良好であったが、保存状態がやや不良であり、花粉外膜が破損・溶解しているものが多く認められた。花粉やシダ類胞子の腐蝕に対する抵抗性は種類により異なり、落葉広葉樹に由来する花粉と比べ針葉樹に由来する花粉やシダ類胞子は酸化に対する抵抗性が高いとされている（中村，1967；徳永・山内，1971；三宅・中越，1998など）。保存状態を考慮すると花粉化石群集は経年変化による分解・消失の影響を受け、分解に強い花粉が選択的に多く残されている可能性がある。

比較的広域の植生を反映する木本類では、マツ属（複維管束亜属を含む）が最も多く産出し、ツガ属、モ

ミ属が次いで認められる。その他ではトウヒ属、スギ属、カバノキ属、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属、ニレ属－ケヤキ属などを伴う。これらのうち、マツ属複維管束亜属（いわゆるニヨウマツ類）は生育の適応範囲が広く、尾根筋や湿地周辺など他の広葉樹の生育に不適な立地にも生育が可能である。また、極端な陽樹であり、やせた裸地などでもよく発芽し生育することから、伐採された土地などに最初に進入する二次林の代表的な種類でもある。マツ属の急増は日本各地で知られており、その原因は自然干渉の結果としての二次林や植林が増加したためとされている（たとえば波田，1987など）。このことから、当時の遺跡周辺でも、二次林等のマツ属が多く存在した可能性がある。マツ属に次いで産出したツガ属については、モミ属、スギ属などとともに温帯性針葉樹であり、ブナ属、コナラ亜属等の冷温帯性落葉広葉樹林と混じって林分を形成していたと推測される。カバノキ属、ハンノキ属、ニレケヤキ属などは、河畔や低湿地等の適湿地を好む種を含む分類群であることから、河川沿いや周辺の低湿地に生育していたと考えられる。

なお、マツ属やツガ属の多産する花粉化石群集は、北河原遺跡・平田宮第２遺跡（中央市）、釜無川を挟み対岸の二本柳遺跡（南アルプス市）等でも確認されており、本地域の後背山地や丘陵部、釜無川の集水域等に、これらの温帯性針葉樹が存在していたことが推定されている（パリノ・サーヴェイ株式会社，2000，2003，2006）。

一方、草本類では、ヨモギ属、イネ科、カヤツリグサ科等の花粉が検出された。植物珪酸体分析結果では、ネザサ節やヨシ属、ススキ属、イチゴツナギ亜科、シバ属等のイネ科植物が認められた。このうち、ヨモギ属、ネザサ節を含むタケ亜科、カヤツリグサ科の一部は、開けた明るい場所を好む人里植物を含む分類群であり、比較的乾いた場所に生育する種を多く含む。また、ヨシ属などのイネ科、カヤツリグサ科の一部は、河畔や湿地などの適湿地を好む種が含まれる。このことから、周辺の比較的乾いた場所にはネザサ節やヨモギ属などが、湿地部にはヨシ属などの草本類が生育していたと推測される。

また、10層を対象とした植物珪酸体分析結果では、栽培植物のイネ属が検出された。イネ属は、胚乳が食糧として利用されるほか、稲藁等の植物体は農業や建築の資材として利用される。発掘調査所見や上記の珪藻分析結果を参考とすると、本地点での稲作は考え難いことから、10層堆積時にこれらを含む土壌が再堆積したことが推測される。なお、試掘調査No.３地点の黒灰色シルトの植物珪酸体分析結果では、栽培種のイネが多量に検出されており、前述したイネ科の花粉の多産や水田雑草を含む分類群（オモダカ属やミズアオイ属などが産出する状況から水田稲作の可能性が示唆されている（パレオ・ラボ，2002）。

⑵植物利用

１号住居跡カマド付近杭材、床面やカマド前面から出土した構築材と考えられる木片は、いずれも針葉樹のヒノキ科またはサワラであった。サワラ以外のヒノキ科が出土していないことを考慮すると、ヒノキ科とした試料もサワラの可能性がある。サワラは、木理が通直で割裂性が高く、加工は容易で耐水性に優れる。サワラは、山地の尾根上等に生育する種類であり、遺跡の立地等を考慮すると周辺には自生していなかったと推測されることから、周辺では入手できないサワラの木材を杭材や構築部材に選択的に利用していた可能性がある。なお、近年、同様の傾向を示す調査事例が蓄積されつつあり、同市内の平田宮第２遺跡では、織機部材（パリノ・サーヴェイ株式会社，2006）や井戸枠部材や祭祀等に用いられた可能性のある木製品にサワラやヒノキ科が多く利用される状況（未公表資料）が確認されている。

立木列は広葉樹のフジキ属に同定された。フジキ属は、いずれも落葉高木で山地に生育する広葉樹であり、フジキとユクノキの２種類がある。現在の山梨県では、甲府盆地周辺の山地にフジキ・ユクノキの生育が確認されているが、いずれも盆地内の沖積地には生育していない（倉田，1971，1973）とされる。なお、立木列はすべて同一種で構成されることや、南北一列に並び検出されたことを考慮すると、植栽木としてフジキ

属を選択的に利用した可能性がある。山梨県内では、木製品も含めてフジキ属が認められた調査事例はなく、フジキ属を植栽木として利用した事例やその利用の背景については今後の課題である。
以上、「パリノ・サーヴェイ株式会社　2006 『小井川遺跡にかかる自然化学分析業務委託報告書』」より一部抜粋

第５章　放射性炭素年代測定

Ⅱ面１号住居跡から出土した木片とカマドに使用された杭および調査区東壁沿いから検出した立木列について、放射性炭素年代測定を株式会社　加速器分析研究所に委託し、その結果は「株式会社 加速器分析研究所　2006 『放射性炭素年代測定結果　報告書　（ＡＭＳ測定）　小井川遺跡』」として報告されている。以下は、その一部を掲載した。なお、試料№は遺構挿図（杭：第７図、立木列：第５図）の番号に対応している。

測定結果

１号住居跡カマド袖部分から検出された杭は、1540±40yrBP（試料№１・IAAA－61381）、1380±40yrBP（№２・IAAA－61382）、1470±30yrBP（№８・IAAA－61383）の14C年代である。それぞれ古墳時代後期から飛鳥時代前半、飛鳥時代後半、飛鳥時代前半の暦年代であり、約160年の時間幅がある。１号住居跡は出土遺物から平安時代（９世紀）頃の住居と推測されるが、その年代より500～350年ほど古い年代である。住居の継続期間と考えるには時間幅が広く、遺物との共伴関係、流木等の古木の利用、建築材の再利用等の可能性について検討する必要がある。立木列の木片は、360±40yrBP（試料№７・IAAA－61384）、320±40yrBP（№14・IAAA－61385）、270±40yrBP（№28・IAAA－61386）、420±30yrBP（№33・IAAA－61387）の14C年代である。室町時代後期から江戸時代初頭の暦年代に相当する。№33は室町時代後期に限定される。立木列は３層の灰色シルト層に根を張る木々であり、この層が室町時代後期から江戸時代初頭にかけての生活面であった可能性がある。

以上、「株式会社 加速器分析研究所　2006 『放射性炭素年代測定結果　報告書　（ＡＭＳ測定）　小井川遺跡』」より一部掲載

第６章　まとめ

調査区東壁沿いのシルト堆積層および立木列について

本遺跡の大半は砂礫が堆積し、Ⅰ面において確認された近世・近代の各遺構は、いずれもこの砂礫上に構築されていた。この砂礫は釜無川の旧流路もしくは一時的な洪水によって堆積したもので、本遺跡から現在の釜無川にかけて広く堆積していることが推測される。砂礫は平安時代の竪穴住居跡が確認された現地表下2.5mの地点まで堆積しており、Ⅱ面調査区の西側半分以上の部分ではさらに下層に続く様相がみられた。これに対し、調査区東壁沿いには現地表面の１mほど下からシルトが東側から西側に斜めに下りながら堆積していた（第５・６図）。シルトの斜面の中間部からは南北に１列に並んだ立木を検出した。立木列の間隔や大きさに明確な規則性は見られなかったが、全て同一種の広葉樹フジキ属であり、斜面上には立木列以外の樹木が皆無であったことからも、人為的に樹種を選択し、１列の並木状に植栽されたと考えられる。

文化３年（1806）に作成された「布施村絵図」には布施の宿（現在の県道市川大門線沿線）の東側に線が

描かれ「信玄堤」と記入されており、この線が調査区外東側の道路の位置に該当する。ただし、堤防が存在したとしても本体が東側の現道路下にまたがっているため、全体の形状が把握できなかった。立木の放射性炭素年代測定によると、シルト層が室町時代後期から江戸時代初頭にかけて堆積した可能性があるとしており、旧釜無川流域における堤防が構築される時期として矛盾はなく、絵図のとおりに調査区東側の現道路に沿って堤防が築かれていた可能性は充分考えられる。

平安時代の竪穴住居跡について

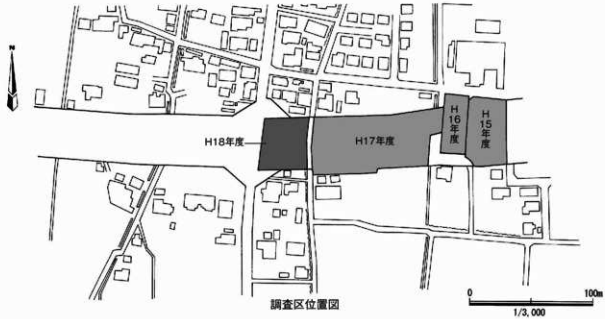
本遺跡では、現地表下約2.5mの地点（Ⅱ面）において平安時代の竪穴住居跡を３軒発見した。住居跡が発見された地点は調査区の南東コーナー付近で、砂礫が堆積した調査区壁の土砂崩落の危険があったため、掘削・精査できたのは１軒の一部であった。掘削範囲にはカマド部分も含まれ、灰色粘土で構築されたカマド袖の内部からは木製の杭を検出した。杭は両袖の縦方向に沿って５～15cm間隔で並んでいた。杭は住居跡上層の遺物包含層掘削の際、遺構確認面から１～３cmほど突出しているものもあったが、いずれも上部が欠損しており、一部炭化しているものもあった。３cmほどの礫を多く含む地中に最大で約30cmも打ち込んであることから、カマド祭祀の一形態というより、カマド袖部の補強材もしくはカマド構築・成形時の骨組みとして機能していた可能性が高いと考えられる。通常、カマドの補強材には礫や土器などが使用される例が多いが、木材を使用する例は中央市が平成18年度に調査した平田宮第２遺跡（３次調査）（第１図８）においても確認されているので、本遺跡周辺における地域的特徴として捉えることができるだろう。

１号住居跡は最も西側に張り出している部分が砂礫によって削剥されていた。これより西側は調査区全体に砂礫が堆積しており、本遺跡から現在の釜無川にかけて広く堆積していることが推測される。しかし、少なくとも平安時代には釜無川の流路は本遺跡付近までは南下しておらず、遺跡周辺には集落が広がっていたと推測される。

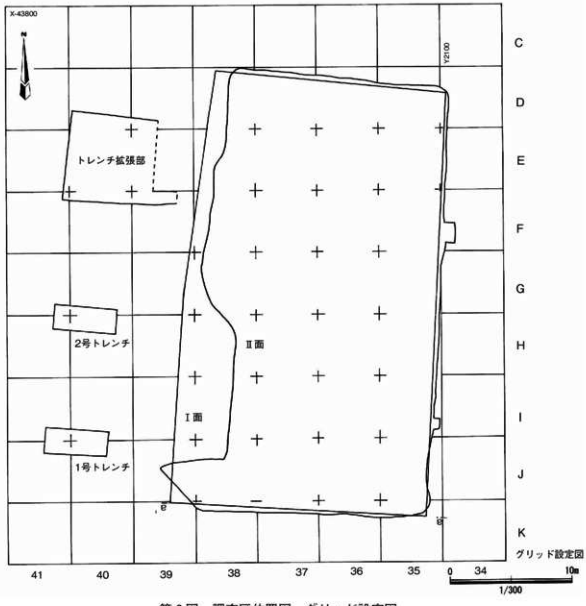
この他、平安時代の遺物包含層（第６図上17層、下20層）は調査区東壁に沿って堆積しており、Ⅱ面Ｆ－35グリッドの断ち割り部分からは、平安時代の遺物とともに古墳時代の古式須恵器（５世紀後半）を含む遺物が出土した。また、Ⅱ面Ｄ・Ｅ－36～Ｄ・Ｅ・Ｆ－37グリッドからもシルトの堆積を確認し、平安時代～中世の遺物が出土したが、同一層からの出土であり、どれも摩耗していたことから、中世以降の流水によってシルトとともに上流から流れ込んだものと思われる。

引用・参考文献

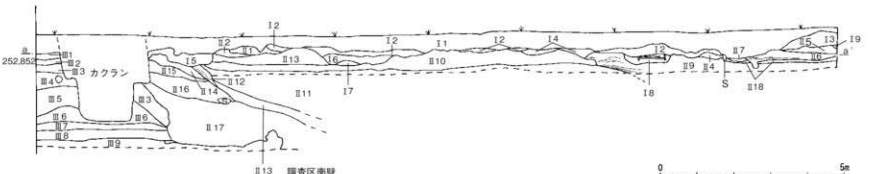
昭和町教育委員会　1997　『昭和町かすみ堤』
田富町教育委員会　2002　『町内遺跡詳細分布調査報告書』
玉穂町教育委員会　2006　『平田宮第２遺跡』玉穂町埋蔵文化財調査報告書　第３集
山梨県教育委員会　1998　『山梨県堤防・河岸遺跡分布調査報告書』　山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第152号
山梨県教育委員会　2007　『平田宮第２遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第244集



調査区位置図



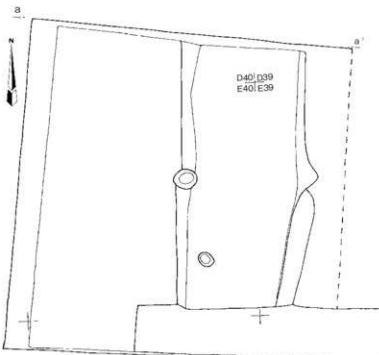
第２図　調査区位置図、グリッド設定図



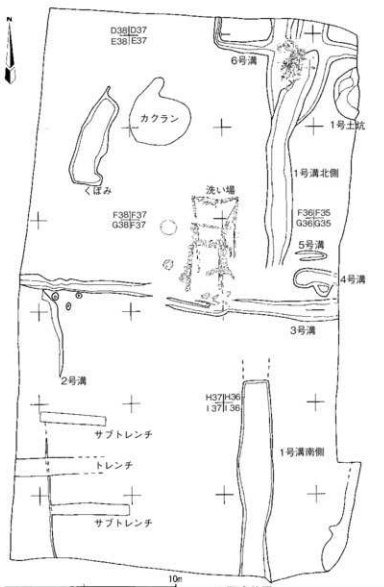
調査区南壁

Ⅰ1　黒褐色土　表土。ビニール・コンクリート片を含む。
Ⅰ2　黒褐色シルト　やや砂質。2cm以下の礫少量を含む。
Ⅰ3　褐色シルト　5cm以下の礫を30%ほど含む。
Ⅰ4　暗褐色シルト　5cm以下の礫を30%ほど含む。
Ⅰ5　灰色シルト
Ⅰ6　黒褐色シルト　5cm以下の礫や木片を少量。白色粗砂を20%ほど含む。
Ⅰ7　黄褐色砂　中砂。5mm以下の礫。黒褐色シルトを少量含む。
Ⅰ8　黒褐色シルト　1cm以下の礫を少量。白色粗砂を20%ほど含む。木枠(桶か)あり。
Ⅰ9　暗褐色シルト　3cmほどの礫を少量含む。
Ⅱ1　灰色砂　細砂。
Ⅱ2　黄褐色砂　粗砂。1cm以下の礫を少量含む。
Ⅱ3　白色砂礫　5cm以下の礫と粗砂。
Ⅱ4　灰色砂　粗砂。白色中砂を20%ほど含む。
Ⅱ5　褐色砂　中砂。1cm以下の礫を少量含む。
Ⅱ6　灰色砂　粗砂。1cm以下の礫を少量含む。葉裏構造が見られる。
Ⅱ7　灰色砂　粗砂。暗褐色シルトを少量含む。
Ⅱ8　暗褐色シルト　白色粗砂を少量含む。
Ⅱ9　灰色砂　粗砂。1cm以下の礫を少量含む。東端に葉裏構造が見られる。
Ⅱ10　白色砂　粗砂。2cm以下の礫を20%ほど含む。
Ⅱ11　淡灰色砂　粗砂。東端に葉裏構造が見られる。
Ⅱ12　灰色シルト　白色中砂を少量含む。葉裏構造が見られる。
Ⅱ13　淡黄褐色粗砂と3cm以下の白色砂礫の混合層。
Ⅱ14　白色砂礫　1cm以下の砂礫。
Ⅱ15　灰色シルト　白色砂礫を少量まだらに含む。
Ⅱ16　白色砂礫　10cm以下の砂礫。まだらに酸化している。
Ⅱ17　白色砂　中砂。5cm以下の礫を少量含む。
Ⅲ1　白色砂　細砂。上部に褐色粗砂が薄く堆積している。
Ⅲ2　暗灰色シルト　白色細砂ブロックが混入。
Ⅲ3　灰色シルトと明黄褐色細砂の混合層。
Ⅲ4　暗灰色シルト　5cm以下の礫を少量含む。
Ⅲ5　灰色シルト　灰白色微砂ブロックが一部混入。
Ⅲ6　暗灰色シルト　5~10cmほどの礫を少量含む。
Ⅲ7　灰白色シルト　灰白色微砂ブロックが一部混入。
Ⅲ8　暗灰色シルト　5cm以下の礫を少量含む。
Ⅲ9　黒灰色シルト　5cm以下の礫を多く含む。平安時代遺物包含層。
Ⅲ10　灰色シルト　暗灰色シルトブロックが一部混入。

第3図　調査区南壁断面図



北西部トレンチ拡張部北壁
1　暗褐色シルト　表土。5～30cmほどの礫を多く含む。
2　褐色砂　ややシルト質。しまりが強い。
3　灰褐色砂　中砂。上部が酸化している。
4　暗灰褐色砂　粗砂。
5　暗灰褐色シルトと3mm以下の灰白色砂礫の混合層。
6　灰白色砂礫　2cm以下の砂礫。
7　黄褐色砂礫　1cm以下の砂礫。
8　暗オリーブシルト　灰白色粗砂を少量含む。やや粘性があり。



第4図　北西トレンチ拡張部・Ⅰ面全体図

N
J35E35
J36E36
I37J37
I38J38
H35E35
H36E36
F35G36
F36G36
F36G36
F37G37
F37G37
F38G38
E36F36
E37F37
1号住
撹乱?
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
a
a'
b
b'
立木
10m
1/200
2m
1/50
252.700
251.800
砂レキ
調査区東側立木部分
1 明灰色シルト 5mm以下の白色砂礫を30%ほど含む。
2 灰色シルト 黄褐色シルトを少量含む。やや砂質。
3 暗灰色シルト 黄褐色シルトを少量含む。
4 灰色シルト 黄褐色シルトを少量含む。砂質。
5 暗灰色シルト 灰色微砂をわずかに含む。

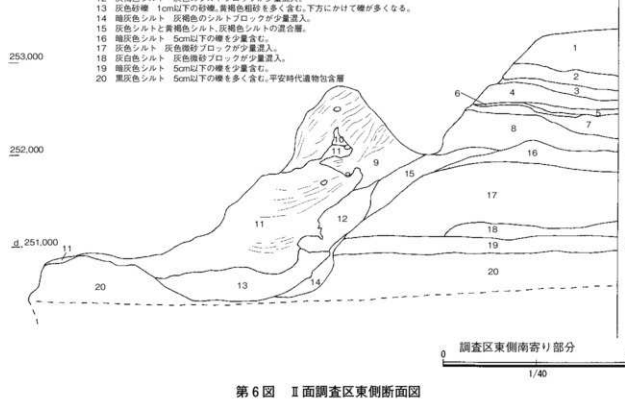
第5図 Ⅱ面全体図

調査区東側北寄り部分

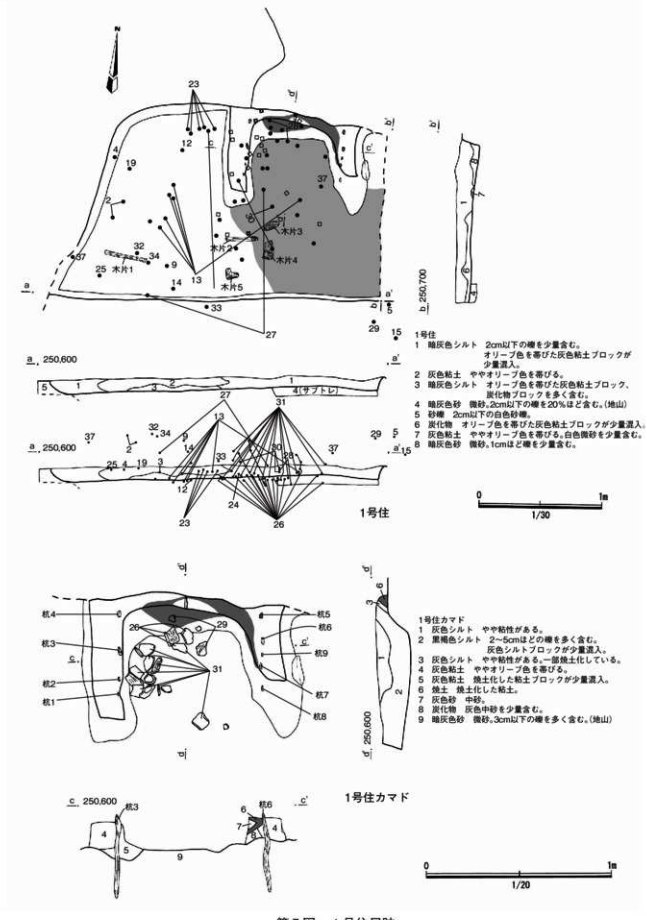
1 暗褐色土　表土。2~20cmほどの礫を多く含む。
2 灰白色シルト　まだらに酸化している。
3 灰白色シルト　2cm以下の礫を多く含む。まだらに酸化している。
4 灰色シルト　上方にかけて砂質が強くなる。
5 灰色シルト　2cm以下の礫を少量含む。
6 灰白色シルト　黄褐色シルト、灰白色微砂を少量含む。
7 灰白色シルト　黄褐色シルト、灰白色微砂を少量含む。上方に白色微砂を多く含む。
8 白色砂　微砂、木の根、木片を多く含む。
9 灰白色砂　微砂、灰色シルトブロックが少量混入。
10 灰褐色シルト　2mm以下の灰白砂礫を少量含む。
11 灰白色シルトと2mm以下の白色砂礫の混合層。
12 灰白色シルト　黄褐色シルト、灰白色微砂を20%含む。
13 灰白色砂　微砂、白色粗砂を少量含む。
14 灰白色シルト　黄褐色シルト、灰白色微砂を少量含む。
15 灰色シルト　灰色微砂ブロックが少量混入。
16 暗灰色シルト　5mm以下礫を少量含む。
17 黒灰色シルト　5cm以下の礫を多く含む。平安時代遺物包含層。
18 暗灰褐色シルト　白色粗砂を少量含む。
19 灰色砂礫　2cm以下の砂礫。暗灰色シルトブロックが少量混入。
20 暗灰色シルト　5cm以下の礫を多く含む。
21 暗灰色シルト　3cm以下の礫を多く含む。
22 暗灰色砂礫　2mm以下の砂礫。暗灰色シルトを少量含む。
23 暗灰色シルト　灰色中砂一微砂を多く含む。
24 灰色砂礫　3cm以下の砂礫。
25 黄灰色シルト　やや砂質。
26 灰色砂　微砂。葉裏構造が見られる。
27 暗灰色砂　微砂。ややシルト質。
28 暗灰色シルト　ややS質。
29 黄灰色砂礫　5mm以下の砂礫。
30 暗灰褐色シルト　2cm以下の礫を少量含む。
31 白色砂　粗砂。1~3cmほどの礫を少量含む。
32 白色砂　粗砂。暗灰色シルトブロックが少量混入。
A 自然科学分析サンプル採取地点

調査区東側南寄り部分

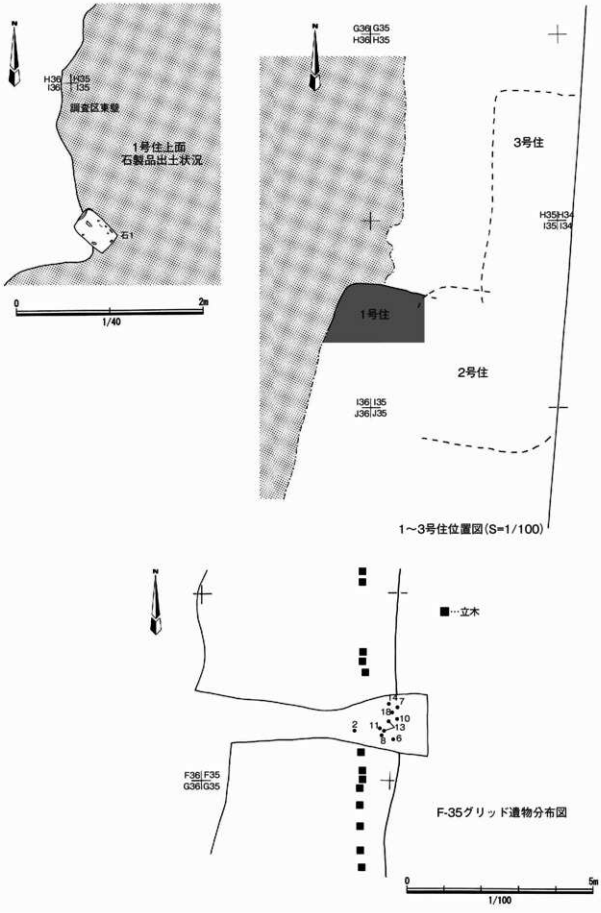
1 暗褐色土　表土。2~20cmほどの礫を多く含む。
2 灰色シルト　灰白色シルトブロックを少量含む。
3 灰白色シルト　やや砂質。まだらに酸化している。
4 暗灰色シルト　上方にかけて砂質が強くなる。
5 灰白色シルト　灰白色微砂を少量含む。
6 灰褐色シルト　やや粘性がある。
7 灰色シルト　黄褐色シルトを少量含む。下方にかけてやや暗灰色を帯びる。
8 灰白色シルトと2mm以下の白色砂礫の混合層。
9 灰色シルトと黄褐色のシルト、明灰白色シルトの混合層。葉裏構造が見られる。
10 灰白色砂　微砂、1cm以下の礫を少量含む。
11 白色砂礫　5mm以下の砂礫。部分的に葉裏構造が見られる。
12 灰褐色シルト　灰色のシルトブロックが少量混入。
13 灰色砂礫　1cm以下の砂礫。黄褐色粗砂を多く含む。下方にかけて礫が多くなる。
14 暗灰色シルト　灰褐色のシルトブロックが少量混入。
15 灰色シルトと黄褐色シルト、灰褐色シルトの混合層。
16 暗灰色シルト　5cm以下の礫を少量含む。
17 灰色シルト　灰色微砂ブロックが少量混入。
18 灰白色シルト　灰色微砂ブロックが少量混入。
19 暗灰色シルト　5cm以下の礫を少量含む。
20 黒灰色シルト　5cm以下の礫を多く含む。平安時代遺物包含層



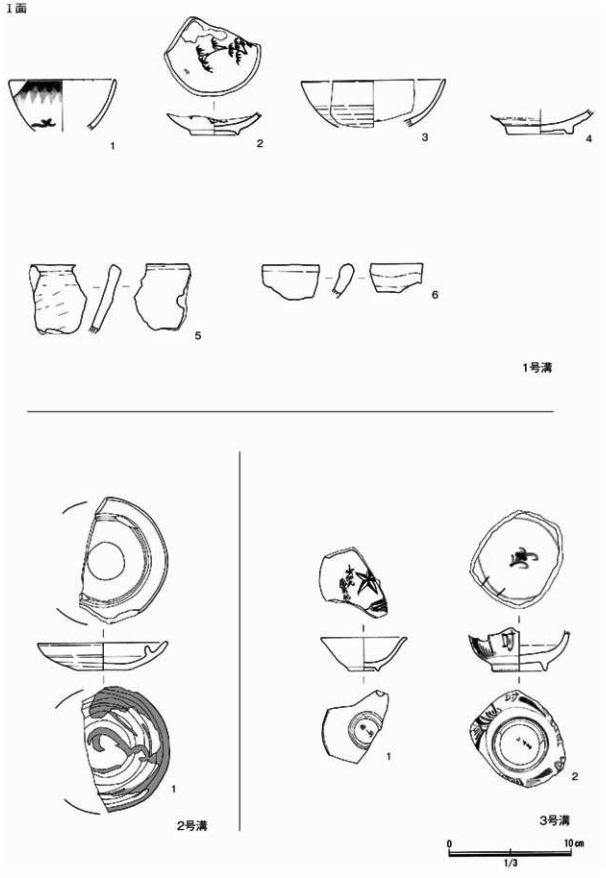
第６図　Ⅱ面調査区東側断面図


1号住
1 暗灰色シルト 2cm以下の礫を少量含む。
オリーブ色を帯びた灰色粘土ブロックが
少量混入。
2 灰色粘土 ややオリーブ色を帯びる。
3 暗灰色シルト オリーブ色を帯びた灰色粘土ブロック、
炭化物ブロックを多く含む。
4 暗灰色砂 微砂、2cm以下の礫を20%ほど含む。(地山)
5 砂礫 2cm以下の白色砂礫。
6 炭化物 オリーブ色を帯びた灰色粘土ブロックが少量混入。
7 灰色粘土 ややオリーブ色を帯びる。白色微砂を少量含む。
8 暗灰色砂 微砂、1cmほど礫を少量含む。
1/30
1号住カマド
1 灰色シルト やや粘性がある。
2 黒褐色シルト 2~5cmほどの礫を多く含む。
灰色シルトブロックが少量混入。
3 灰色シルト やや粘性がある。一部焼土化している。
4 灰色粘土 ややオリーブ色を帯びる。
5 灰色粘土 焼土化した粘土ブロックが少量混入。
6 焼土 焼土化した粘土。
7 灰色砂 中砂。
8 炭化物 灰色中砂を少量含む。
9 暗灰色砂 微砂、3cm以下の礫を多く含む。(地山)
1/20

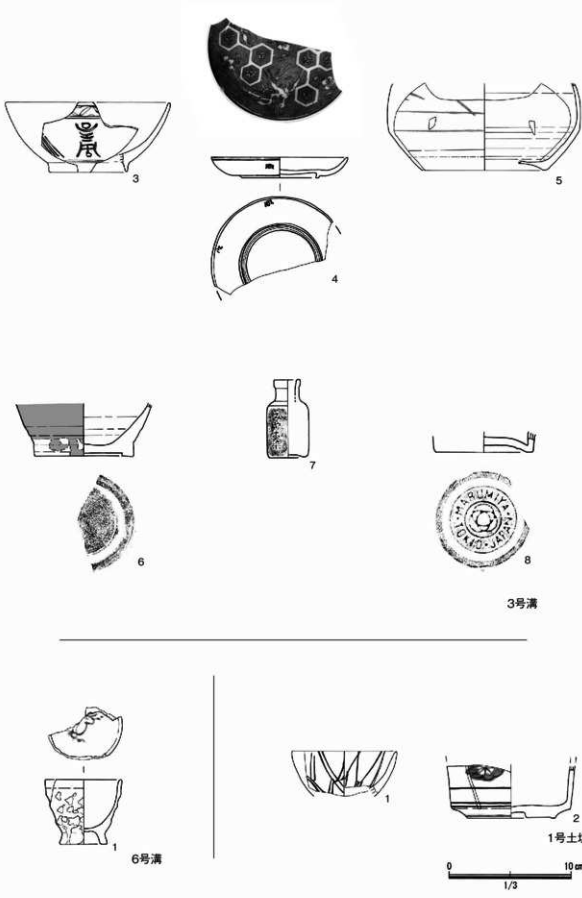
第７図　１号住居跡



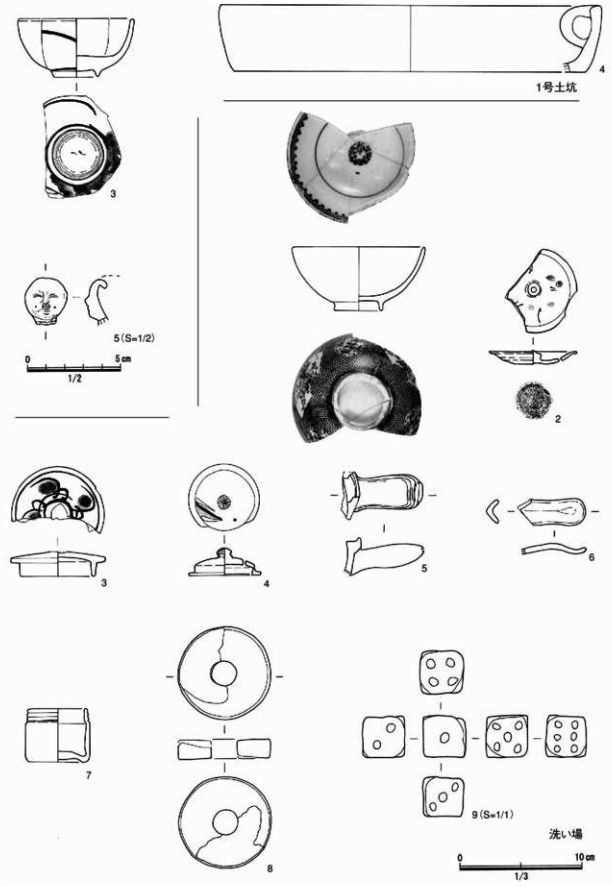
第8図　1号住上面、1～3号住、F－35グリッド



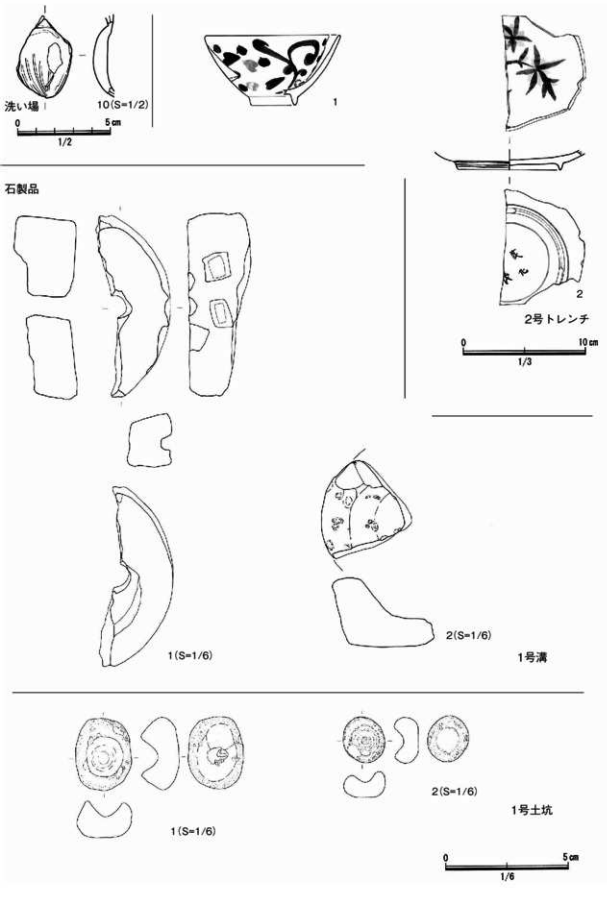
第９図　１・２・３号溝出土遺物



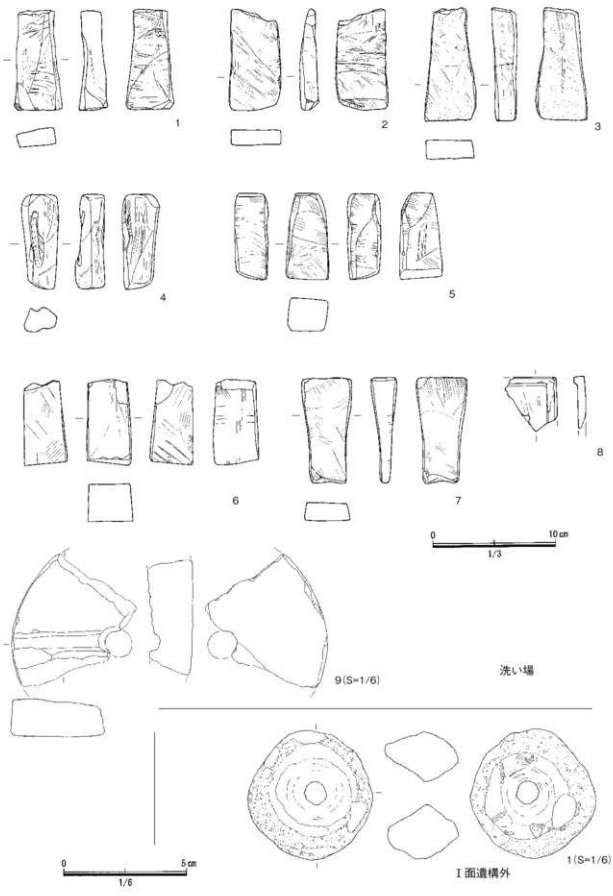
第10図　3・6号溝、1号土坑出土遺物



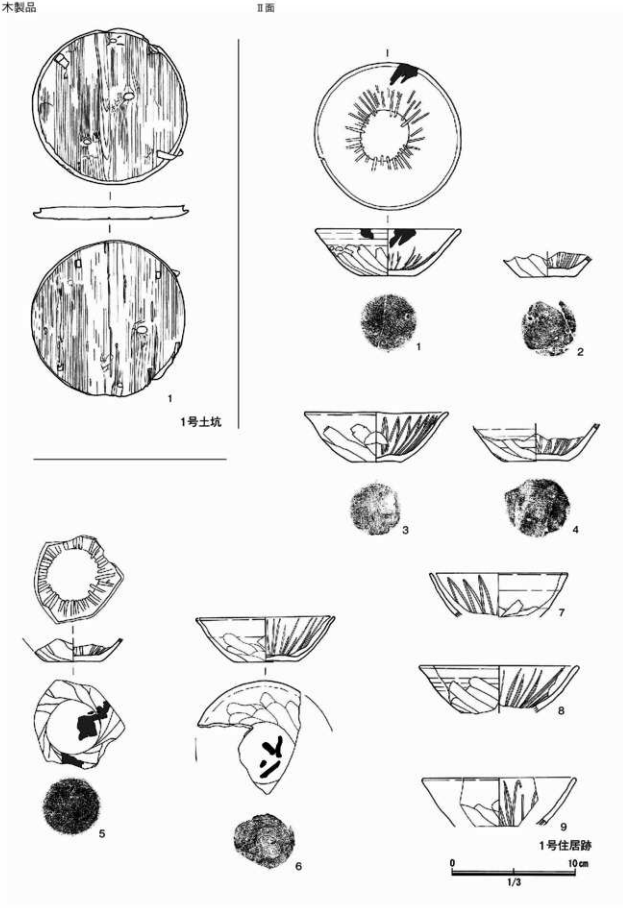
第11図　1号土坑、洗い場出土遺物



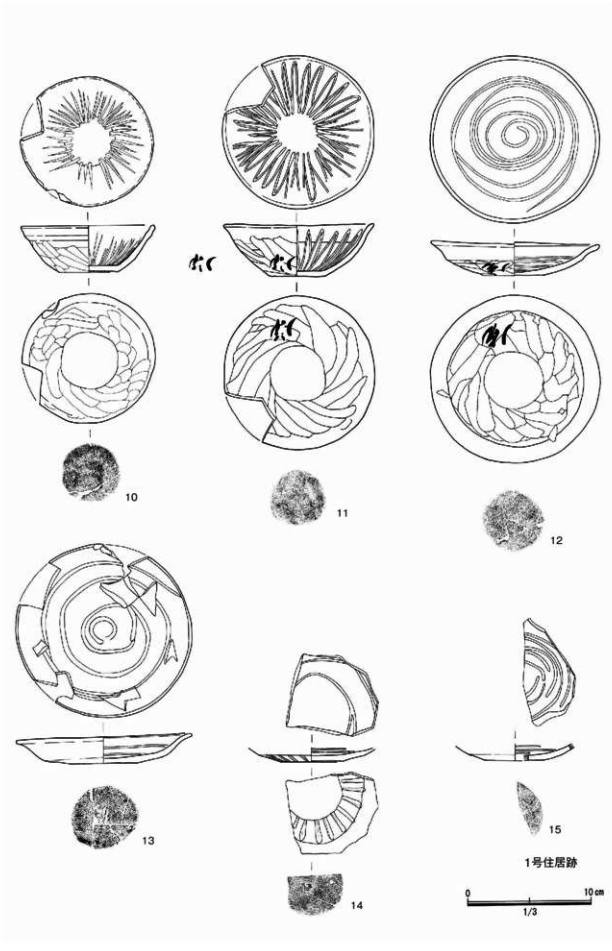
第12図　洗い場・２号トレンチ出土遺物、１号溝・１号土坑出土石製品



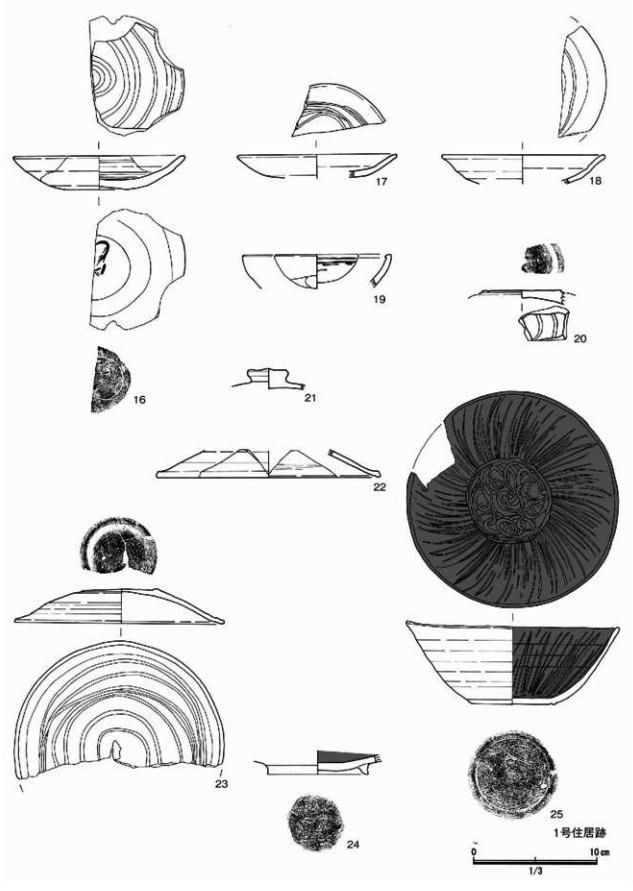
第13図　洗い場・Ⅰ面遺構外出土石製品



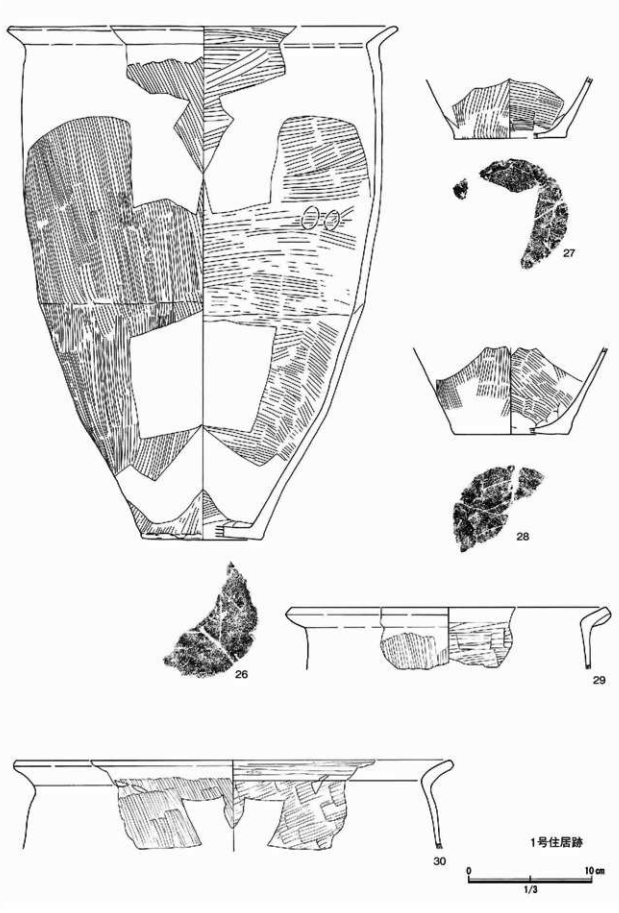
第14図　１号土坑出土木製品、１号住居跡出土遺物



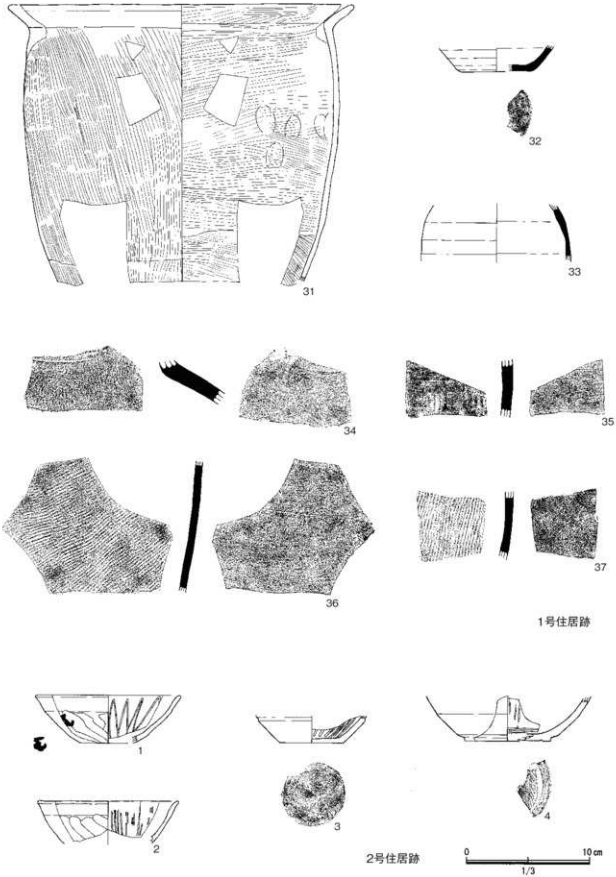
第15図　1号住居跡出土遺物



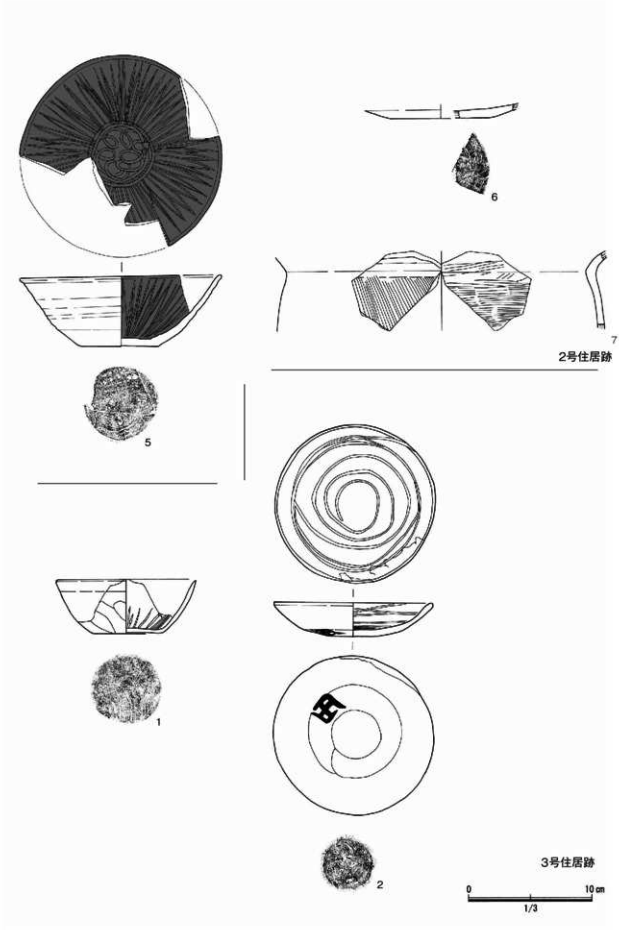
第16図　1号住居跡出土遺物



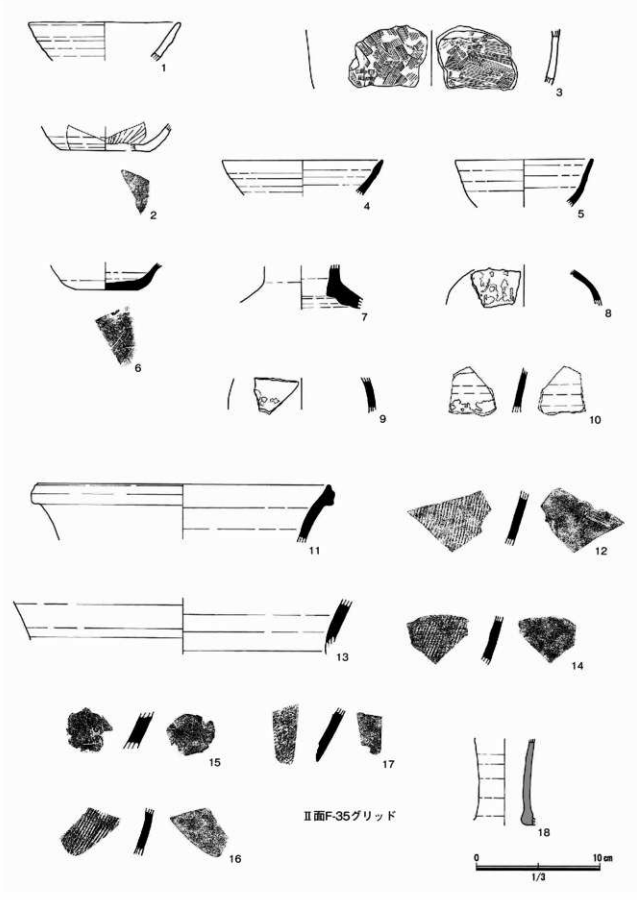
第17図　1号住居跡出土遺物



第18図　1・2号住居跡出土遺物

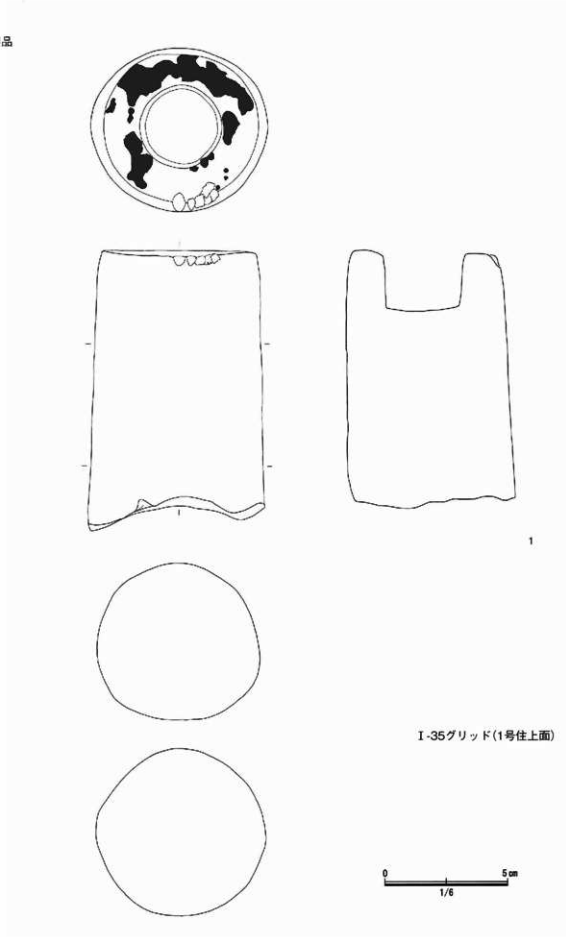


第19図　2・3号住居跡出土遺物

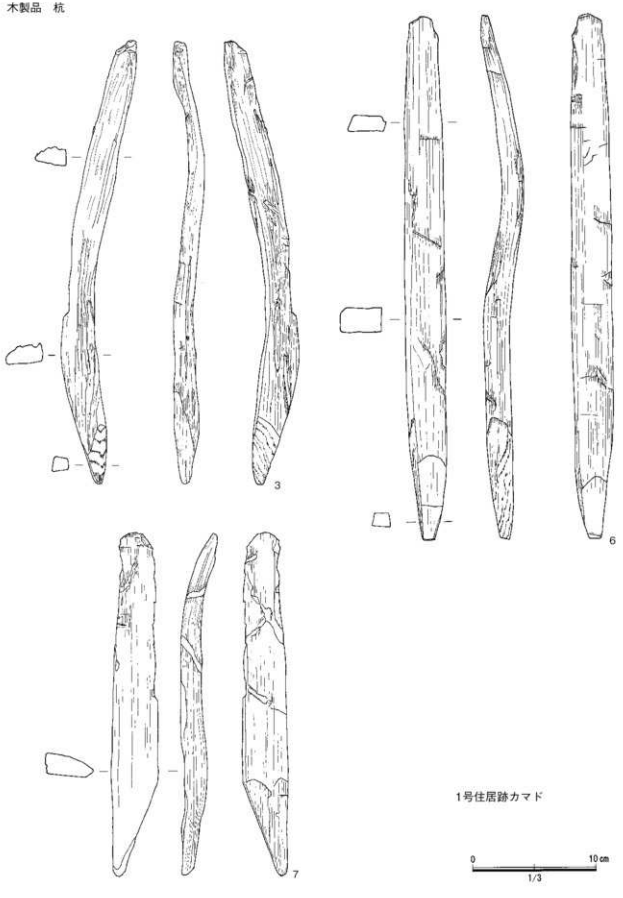


第20図　Ⅱ面Ｆ－35グリッド出土遺物

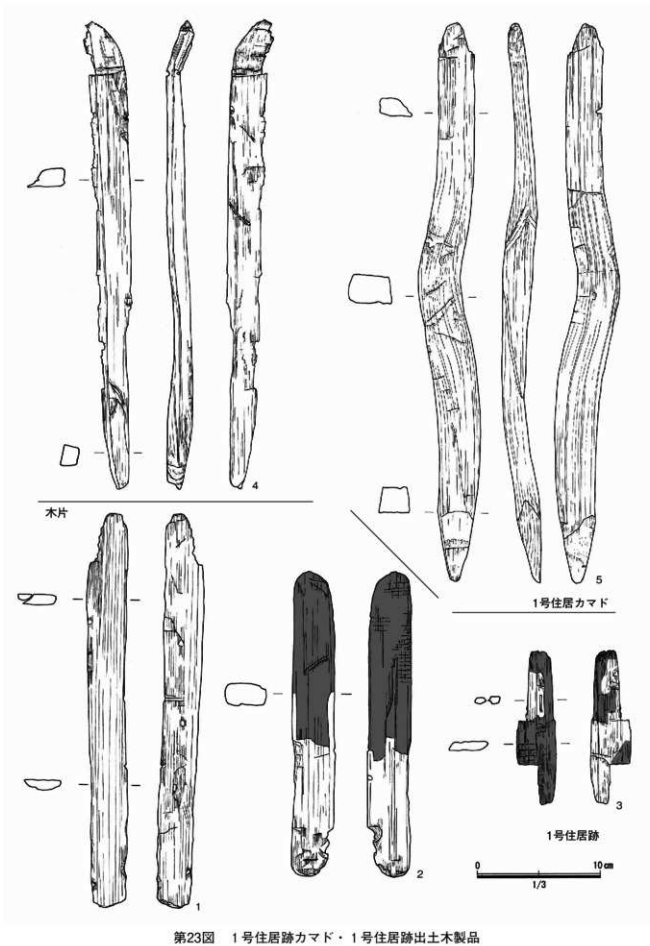
石製品



第21図　Ⅱ面F－35グリッド出土石製品



第22図　1号住居跡カマド出土木製品



第23図　1号住居跡カマド・1号住居跡出土木製品

第1表　遺物一覧

焼き物類

図	番号	面	遺構	種別	器種	注記番号	法量（cm）			胎土色調	胎土質	焼成	残存率	時期	備考
							口径[縦]	器高[横]	底径[厚]						
9	1	1	1号溝	磁器	碗	1ミゾ一括	(8.6)	－	－	灰白色	密	良好	30%	19世紀第2四	染付　肥前系　腰丸碗
9	2	1	1号溝	磁器	碗	1ミゾ一括	－	－	1.8	灰白色	やや粗い	良好	－		染付　肥前系　内面異物付着
9	3	1	1号溝	陶器	碗	1ミゾ北4	(11.6)	－	－	灰白色（やや黄色）	密	良好	30%		貫入透明釉
9	4	1	1号溝	陶器	碗	1ミゾ北一括	－	－	5.4	灰白色	やや粗い	良好	－		内・外面鉄釉
9	5	1	1号溝	土師質土器	内耳土器	1ミゾ一括	－	－	－		やや粗い	良好	－		
9	6	1	1号溝	土師質土器	内耳土器	1ミゾ一括	－	－	－		やや粗い	良好	－		
9	1	1	2号溝	陶器	灯明受皿	2ミゾ14	(10.4)	2.25	4.2	灰白色（やや黄色）	やや粗い	良好	60%	明治～	内面全体・外面口縁部鉄釉　外面ロクロなで痕　底部回転糸切り痕
9	1	1	3号溝	磁器	盃	3ミゾ一括	(7.0)	2.7	2.6	白色	密	良好	50%	近代	金文字手描き上絵付け　内面星形、「参四九除隊記［念］」、?　高台裏「甲田」
9	2	1	3号溝	磁器	碗	3ミゾ4	－	－	(4.5)	灰白色	密	良好	－		染付　肥前系　高台内焼継印
10	3	1	3号溝	灰釉陶器	壺	3ミゾ8	－	－	(8.0)	灰黄色	やや粗い	良好	－		内・外面ロクロなで痕高台裏回転ヘラ削り痕
10	4	1	3号溝	磁器	皿	3ミゾ5	(11.0)	1.7	6.2	灰白色	密	良好	50%	明治	コバルト染付　内面銅板転写
10	5	1	3号溝	陶器	土瓶	2ミゾ16、3ミゾ103ミゾ一括	－	(7.0)	(10.0)	灰白色	密	良好	－		内面ロクロなで痕
10	6	1	3号溝	磁器	碗	3ミゾ2	(13.4)	5.7	(6.2)	灰白色	密	良好	30%	明治	コバルト染付　瀬戸美濃系
10	7	1	3号溝	ガラス製品	瓶	3ミゾ一括	(2.1)	6.3	3	透明	－	－	100%（蓋なし）	大正～	側面「みやこ（古）染め」
10	8	1	3号溝	ガラス製品	瓶	3ミゾ1	－	－	8	緑色	－	－	－		底面「TOKYO・JAPAN・MARUMIYA・」
10	1	1	6号溝	陶器	盃	6ミゾ1	(6.4)	5.2	(3.8)	灰白色	密　黒色粒子	良好	50%		見込み部下絵付け
10	1	1	1号土坑	磁器	碗	1土一括	(8.4)	－	－	灰白色	密	良好	－		染付　肥前系
10	2	1	1号土坑	磁器	瓶?	1土1	－	－	7.2	灰白色	密	良好	－		染付　肥前系　蛇の目高台　外面焼継用白玉液垂れ痕　内面無釉・ロクロなで痕
11	3	1	1号土坑	磁器	碗	1土一括	(9.4)	4.7	3.6	灰白色黒色粒子	密	良好	50%	18世紀	染付　肥前系　高台内銘有り
11	4	1	1号土坑	土師質土器	焙烙	1土2	(30.6)	5.5	(28.4)	にぶい褐色	密　白色粒子　雲母	良好	5%		内・外面ヘラなで痕
11	5	1	1号土坑	土製品	泥めんこ	1土10	[2.5]	[2.2]	－	橙色	密	良好	－		裏面欠損か?
11	1	1	洗い場	磁器	碗	洗一括	(10.6	5.2	4	灰白色	密	良好	50%	明治	コバルト染付　型紙摺絵
11	2	1	洗い場	陶器	蓋	洗一括	(7.0)	1.1	2.7	灰白色黒色粒子	密	良好	60%		裏面ロクロなで痕　土瓶の蓋
11	3	1	洗い場	陶器	蓋	洗一括	(6.0)	－	－	淡黄色	密	良好	60%		
11	4	1	洗い場	陶器	蓋	洗一括	5.7	2.2	－	黄灰色	密　黒色粒子	良好	90%		
11	5	1	洗い場	陶器	把手	洗一括	－	－	－	褐灰色	やや粗い　白色粒子	良好	－		外面施釉　内面ロクロなで痕　行平（土鍋）の把手　把手部は中空
11	6	1	洗い場	陶器	レンゲ	洗一括	－	－	－	灰白色	密	良好	－		
11	7	1	洗い場	ガラス製品	瓶	洗2	4.6	4.3	5	青味のある透明	－	－	100%（蓋なし）		
11	8	1	洗い場	磁器	戸車	洗一括	径7.4	厚1.6	孔径2.1	灰白色	やや粗い　黒色粒子	良好	80%		
11	9	1	洗い場	プラスチック	サイコロ	洗一括	1.1	1.1	1.1	白色	－	－	－	現代	
12	10	1	洗い場	土製品	泥めんこ	洗一括	－	－	－	橙色	密	良好	－		
12	1	－	2号トレンチ	磁器	碗	西T2一括	(11)	5.7	(3.5)	灰白色	密	良好	40%	明治	コバルト染付　瀬戸美濃系
12	2	－	2号トレンチ	磁器	皿	西T2一括	－	－	(8.2)	灰白色	密	良好	30%	明治	コバルト染付　肥前系
14	1	Ⅱ	1号住	土師器	坏	1住10	11	3.8	4.5	橙色	密　赤色粒子	良好	100%	9世紀後	外面ヘラ削り　内面暗文
14	2	Ⅱ	1号住	土師器	坏	石囲4・5、東カベ南一括	－	－	4.4	鈍い黄橙色	密　白色　赤色粒子	良好	30%	9世紀後	外面ヘラ削り　内面暗文
14	3	Ⅱ	1号住	土師器	坏	東カベ14・一括	(11.6)	4	4	褐色	密　白色　赤色粒子	良好	50%	9世紀後	外面ヘラ削り　内面暗文
14	4	Ⅱ	1号住	土師器	坏	1住52	－	－	5.2	橙色	密　白色　赤色粒子	良好	35%	9世紀後	外面ロクロなで・ヘラ削り　内面暗文
14	5	Ⅱ	1号住	土師器	坏	東カベ南2	－	－	4.4	橙色	密　白色　赤色粒子	良好	35%	9世紀後	外面ヘラ削り　底部外面に煤付着
14	6	Ⅱ	1号住	土師器	坏	1住一括	(11.4)	5	3.7	明黄褐色	密　白色　赤色粒子	良好	35%	9世紀後	外面ロクロなで・手持ちヘラ削り　内面暗文
14	7	Ⅱ	1号住	土師器	坏	1住一括	(11.2)	－	－	橙色	密　白色　赤色粒子	良好	破片	9世紀後	外面ロクロなで・手持ちヘラ削り　内面暗文
14	8	Ⅱ	1号住	土師器	坏	1住一括	(13.0)	－	－	鈍い褐色	密　赤色粒子	良好	25%	9世紀後	外面ロクロなで・手持ちヘラ削り　内面暗文
14	9	Ⅱ	1号住	土師器	坏	石囲23	(12.4)	－	－	橙色	密　赤色粒子	良好	破片	9世紀後	外面ロクロなで・手持ちヘラ削り　内面暗文
15	10	Ⅱ	1号住	土師器	坏	1住南一括	10.8	3.8	4.8	橙色	密　赤色粒子	良好	95%	9世紀後	外面ロクロなで・手持ちヘラ削り　内面暗文
15	11	Ⅱ	1号住	土師器	坏	1住一括	12.2	4.3	4.5	鈍い黄褐色	密　赤色粒子	良好	95%	9世紀後	外面ロクロなで・手持ちヘラ削り　内面暗文　体部外面墨書
15	12	Ⅱ	1号住	土師器	皿	1住51	13.6	2.8	4.6	鈍い黄褐色	密　赤色粒子	良好	99%	9世紀後	外面ロクロなで・手持ちヘラ削り　内面暗文　体部外面墨書
15	13	Ⅱ	1号住	土師器	皿	1住10・19・23・44・45・46・72	14.2	2.3	5.2	鈍い黄橙色	密　白色　赤色粒子	良好	90%	9世紀後	外面ロクロなで、回転ヘラ削り　内面暗文

図	番号	面	遺 構	種 別	器 種	注記番号	法 量（cm）			胎土色調	胎土質	焼成	残存率	時 期	備 考
							口径（最）	器高（復）	底径（復）						
15	14	Ⅱ	1号住	土師器	鉢	石図25	－	－	(5.0)	赤褐色	密 赤色粒子	良好	35%	9世紀後	外面回転ヘラ削り　内面暗文
15	15	Ⅱ	1号住	土師器	鉢	東カベ南5	－	－	(5.0)	鈍い橙色	密　白色 赤色粒子	良好	破片	9世紀後	外面回転ヘラ削り　内面暗文
16	16	Ⅱ	1号住	土師器	鉢	1住一括	(13.8)	2.7	(5.0)	鈍い橙色	密　白色 赤色粒子	良好	40%	9世紀後	外面回転ヘラ削り　内面暗文底部墨書か？
16	17	Ⅱ	1号住	土師器	鉢	1住一括	(13.0)	－	－	褐色	密 赤色粒子	良好	破片	9世紀後	外面回転ヘラ削り　内面暗文
16	18	Ⅱ	1号住	土師器	鉢	1住一括	(13.4)	－	－	橙色	密　白色 赤色粒子	良好	破片	9世紀後	外面回転ヘラ削り　内面暗文
16	19	Ⅱ	1号住	土師器	坏	1住一括	(12.0)	－	－	黒褐色	密 白色粒子	良好	破片	古墳時代	外面手持ちヘラ削り　内面ミガキ
16	20	Ⅱ	1号住	土師器	蓋	1住一括	－	－	上部径 (6.4)	鈍い褐色	密 赤色粒子	良好	破片	9世紀後	外面回転ヘラ削り　内面暗文
16	21	Ⅱ	1号住	土師器	蓋	1住一括	－	－	－	鈍い橙色	密 赤色粒子	良好	破片	9世紀後	つまみ部
16	22	Ⅱ	1号住	土師器	蓋	1住一括	(18.0)	－	－	鈍い橙色	密　黒色 赤色粒子	良好	破片	9世紀後	外面ロクロなで　内面暗文？
16	23	Ⅱ	1号住	土師器	蓋	1住11・21・22・24・32・33	17.2	2.8	上部径 6.8	鈍い褐色	密 赤色粒子	良好	60%	9世紀後	外面ロクロなで・回転ヘラ削り　内面暗文
16	24	Ⅱ	1号住	土師器	内黒椀	東カベ南15	－	－	8.2	鈍い褐色	密　白色 赤色粒子	良好	40%	9世紀後	内面黒色処理　貼り付け高台
16	25	Ⅱ	1号住	土師器	内黒坏	東カベ南13	17.2	6.2	6.8	鈍い橙色	密　白色 赤色粒子	良好	95%	9世紀後	外面ロクロなで・回転ヘラ削り内面暗文・黒色処理
17	26	Ⅱ	1号住	土師器	甕	1住5・9・30外、1住カ3～5外	(31.6)	41.4	(9.6)	黒褐色	白・赤色粒子 雲母	良好	65%	9世紀後	外面縦方向刷毛目　内面横方向刷毛目
17	27	Ⅱ	1号住	土師器	甕	石図27・37	－	－	(9.0)	黒褐色	白・黒色粒子 雲母	良好	底部破片	9世紀後	外面縦方向刷毛目　内面横方向刷毛目
17	28	Ⅱ	1号住	土師器	甕	1住カ20	－	－	(9.0)	黒褐色	白・黒・赤粒子 雲母	良好	底部破片	9世紀後	外面縦方向刷毛目　内面横方向刷毛目
17	29	Ⅱ	1号住	土師器	甕	東カベ南1	(25.4)	－	－	暗褐色	白色粒子 雲母	良好	口縁部 破片	9世紀後	外面縦方向刷毛目　内面横方向刷毛目
17	30	Ⅱ	1号住	土師器	甕	1住38・59石図39外	(35.6)	－	－	褐色	黒・赤粒子 雲母	良好	口縁部 破片	9世紀後	外面縦方向刷毛目　内面横方向刷毛目
18	31	Ⅱ	1号住	土師器	甕	1住4・30・31外、1住カ6・7・9外	(28.0)	－	－	暗褐色	白・黒・赤粒子 雲母	良好	40%	9世紀後	外面縦方向刷毛目　内面横方向刷毛目
18	32	Ⅱ	1号住	須恵器	坏	石図11	－	－	(5.6)	灰色	密	良好	破片	9世紀後	内・外面ロクロなで
18	33	Ⅱ	1号住	須恵器	壺	石図24	－	－	－	灰色	密　白色粒子	良好	破片	9世紀後	内・外面ロクロなで
18	34	Ⅱ	1号住	須恵器	壺	石図12	－	－	－	灰色	密　白色粒子	良好	破片	9世紀後	内・外面横方向なで
18	35	Ⅱ	1号住	須恵器	甕	1住一括	－	－	－	緑灰色	密　白色粒子	良好	破片	9世紀後	外面タタキ目　内面ロクロなで
18	36	Ⅱ	1号住	須恵器	甕	1住一括	－	－	－	灰色	密　白色粒子	良好	破片	9世紀後	外面タタキ目　内面ロクロなで
18	37	Ⅱ	1号住	須恵器	甕	石図3	－	－	－	灰色	密　白色粒子	良好	破片	9世紀後	外面タタキ目　内面ロクロなで
18	1	Ⅱ	2号住	土師器	坏	2住カ外北西一括	(11.8)	3.9	(4.6)	鈍い橙色	密　赤色 白色粒子	良好	30%	9世紀後	外面ロクロなで・手持ちヘラ削り　内面暗文　体部外面墨書か？
18	2	Ⅱ	2号住	土師器	坏	2住カ外北西一括	(11.2)	－	－	鈍い褐色	密 赤色粒子	良好	破片	9世紀後	外面ロクロなで・手持ちヘラ削り　内面暗文
18	3	Ⅱ	2号住	土師器	坏	2住カ一括	－	－	5.2	橙色	密　白色 赤色粒子	良好	50%	9世紀後	外面ロクロなで・回転ヘラ削り　内面暗文
18	4	Ⅱ	2号住	土師器	高台坏	2住カ一括	－	－	(7.0)	鈍い橙色	密　赤色 粒子	良好	破片	9世紀後	外面ロクロなで・回転ヘラ削り　内面暗文　削り出し高台
19	5	Ⅱ	2号住	内黒坏	内黒坏	2住カ一括2住カ外北西一括	16.3	5.8	6	鈍い黄橙色	密　白色 赤色粒子	良好	75%	9世紀後	外面ロクロなで・回転ヘラ削り　内面暗文・黒色処理
19	6	Ⅱ	2号住	土師器	鉢	2住一括	－	－	(8.0)	鈍い橙色	密　白色 赤色粒子	良好	破片	9世紀後	外面ロクロなで・回転ヘラ削り　内面ロクロなで
19	7	Ⅱ	2号住	土師器	甕	2住一括	－	－	－	暗褐色	白・黒・赤粒子 雲母	良好	破片	9世紀後	外面縦方向刷毛目　内面横方向刷毛目
19	1	Ⅱ	3号住	土師器	坏	3住一括	(11.4)	4.3	5.6	褐色	密 赤色粒子	良好	30%	9世紀後	外面ロクロなで・手持ちヘラ削り　内面暗文
19	2	Ⅱ	3号住	土師器	鉢	3住一括	12.8	2.7	3.9	褐色	密 赤色粒子	良好	100%	9世紀後	外面回転ヘラ削り　内面暗文体部外面墨書「田」
20	1	Ⅱ	F-35グリッド	土師器	坏	東カベ北16	(12.2)	－	－	鈍い黄橙色	密　白色 赤色粒子	良好	破片	10世紀後	外面ロクロなで　内面摩耗して不明瞭
20	2	Ⅱ	F-35グリッド	土師器	坏	東カベ北10	－	－	(7.2)	橙色	密　白色 赤色粒子	良好	破片	9世紀前	外面ロクロなで　内面暗文
20	3	Ⅱ	F-35グリッド	土師器	鉢	東カベ北一括	－	－	－	灰黄褐色	白・黒・赤粒子 雲母	良好	破片	古墳時代	内・外面縦刷毛目
20	4	Ⅱ	F-35グリッド	須恵器	坏	東カベ北一括	(13.0)	－	－	灰色	やや粗い 白色粒子	良好	破片	平安時代	内・外面ロクロなで
20	5	Ⅱ	F-35グリッド	須恵器	坏	東カベ北一括	(11.2)	－	－	灰色	やや粗い 白色粒子	良好	破片	平安時代	内・外面ロクロなで
20	6	Ⅱ	F-35グリッド	須恵器	坏	東カベ北15	－	－	(5.0)	灰色	やや粗い 白色粒子	良好	破片	平安時代	内・外面ロクロなで
20	7	Ⅱ	F-35グリッド	須恵器	壺	東カベ北18	－	－	－	青灰色	やや粗い 白色粒子	良好	破片	平安時代	内・外面ロクロなで
20	8	Ⅱ	F-35グリッド	須恵器	壺	東カベ北5	－	－	－	表面灰色断面紫灰色	粗い　白色 赤色粒子	良好	破片	古墳時代5世紀後	外面自然釉
20	9	Ⅱ	F-35グリッド	須恵器	壺	東カベ北一括	－	－	－	表面灰色断面紫灰色	粗い　白色粒子 白英	良好	破片	古墳時代5世紀後	外面自然釉
20	10	Ⅱ	F-35グリッド	須恵器	壺・甕	東カベ北1	－	－	－	表面灰色断面赤灰色	粗い　白色粒子 白英	良好	破片	古墳時代5世紀後	内・外面なで
20	11	Ⅱ	F-35グリッド	須恵器	甕	東カベ北7	(23.6)	－	－	暗青灰色	粗い 白色粒子	良好	破片	古墳時代5世紀後	内・外面ロクロなで
20	12	Ⅱ	F-35グリッド	須恵器	甕	東カベ北一括	－	－	－	表面灰色断面紫灰色	粗い　白色粒子 白英	良好	破片	古墳時代5世紀後	外面タタキ目　内面なで

図	番号	面	遺　構	種　別	器　種	注記番号	法　量（cm）			胎土色調	胎土質	焼成	残存率	時　期	備　考
							口径（最）	器高（現）	底径（厚）						
20	13	Ⅱ	F-35グリッド	須恵器	壺	東カベ北3・6	－	－	－	灰色	粗い 白色粒子	良好	破片	古墳時代 5世紀後	内・外面ロクロなで
20	14	Ⅱ	F-35グリッド	須恵器	甕	東カベ北11	－	－	－	灰色	粗い　白色粒子 石英	良好	破片	平安時代	外面タタキ目　内面なで
20	15	Ⅱ	F-35グリッド	須恵器	甕	東カベ北一括	－	－	－	灰色	粗い 白色粒子	良好	破片	平安時代	外面縦方向ハケ目　内面なで
20	16	Ⅱ	F-35グリッド	須恵器	甕	東カベ北一括	－	－	－	鈍い赤褐色	粗い 白色粒子	良好	破片	古墳時代	外面タタキ目　内面ロクロなで
20	17	Ⅱ	F-35グリッド	須恵器	甕	東カベ北一括	－	－	－	鈍い赤褐色	粗い 白色粒子	良好	破片	古墳時代	外面タタキ目　内面ロクロなで
20	18	Ⅱ	F-35グリッド	灰釉陶器	長頸壺	東カベ北9・14	－	－	－	灰白色	密	良好	破片	平安時代	内・外面ロクロなで

石製品

図	番号	面	遺　構	種　別	注記番号	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	時　期	備　考
12	1	Ⅰ	1号溝	石臼	1トノ北5	29.2	12	10	近代	安山岩
12	2	Ⅰ	1号溝	石臼	1トノ乃	15.1	14.4	13	近代	安山岩
12	1	Ⅰ	1号土坑	軸受石	1土8	15.5	11.9	8	近世	安山岩
12	2	Ⅰ	1号土坑	軸受石	1土5	7.3	6.6	4	近世	デイサイト
13	1	Ⅰ	洗い場	砥石	洗い場一括	8	2.9	1.3	近代～現代	凝灰岩
13	2	Ⅰ	洗い場	砥石	洗い場一括	7.5	3.9	1.1	近代～現代	凝灰岩
13	3	Ⅰ	洗い場	砥石	洗い場一括	9	4	1.7	近代～現代	凝灰岩
13	4	Ⅰ	洗い場	砥石	洗い場一括	7.7	3	2	近代～現代	凝灰岩
13	5	Ⅰ	洗い場	砥石	洗い場一括	6.9	3.5	2.6	近代～現代	凝灰岩
13	6	Ⅰ	洗い場	砥石	洗い場一括	6.8	3.7	3	近代～現代	凝灰岩
13	7	Ⅰ	洗い場	砥石	洗い場一括	8.6	4.1	1.5	近代～現代	凝灰岩
13	8	Ⅰ	洗い場	硯	洗い場一括	4.4	4.2	0.9	近代～現代	凝灰岩
13	9	Ⅰ	洗い場	石臼	洗い場一括	21.5	19.9	7.2	近代～現代	安山岩
13	1	Ⅰ	1面遺構外	軸受石	洗い場一括	21.2	20.2	11.8	近代～現代	安山岩
21	1	Ⅱ	I-35グリッド	－	洗い場一括	－（残45.5）	径27.0	－	近代～現代	泥岩　上面四部周辺に黒色物付着（膠等の接着剤か？）

木製品

図	番号	面	遺　構	種　別	注記番号	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	時　期	備　考
14	1	Ⅰ	1号土坑	曲物　底板	1土3	径	－	10	近世	4カ所に桜の樹皮が残る。
22	3	Ⅱ	1号住カマド	杭	1住カ杭3	35.9	2.9	2	平安時代	断面を長方形、先端を鋭角に加工している。
22	6	Ⅱ	1号住カマド	杭	1住カ杭4	38	3	1.9	平安時代	断面を長方形、先端を鋭角に加工している。
22	7	Ⅱ	1号住カマド	杭	1住カ杭5	45.3	3.5	2.5	平安時代	断面を長方形、先端を鋭角に加工している。
22	4	Ⅱ	1号住カマド	杭	1住カ杭6	42.6	3.5	2.2	平安時代	断面を長方形、先端を鋭角に加工している。
22	5	Ⅱ	1号住カマド	杭	1住カ杭7	27.9	3.8	1.9	平安時代	断面を長方形、先端を鋭角に加工している。
23	1	Ⅱ	1号住	木片	1住木1	31.9	3.2	6.8	平安時代	
23	2	Ⅱ	1号住	木片	1住木2	24.7	3.4	0.8	平安時代	表面積の1/2以上が炭化している。
23	3	Ⅱ	1号住	木片	1住木3	12.3	3.2	0.7	平安時代	表面積の3/4以上が炭化している

写真図版

遺構写真

Ⅰ面　1号溝

Ⅰ面　1号溝北側桶・木材・石集中部分

Ⅰ面　2号溝

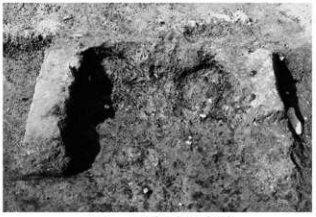
Ⅰ面　3号溝

Ⅰ面　洗い場

Ⅰ面　1号土坑

Ⅰ面　1号土坑遺物出土状況

Ⅱ面　1号住居跡



Ⅱ面　1号住居跡カマド

Ⅱ面　1号住居跡カマド袖部杭検出状況

Ⅱ面　調査区東壁沿いの立木列

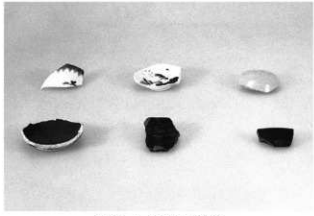
Ⅱ面　立木列の根部分検出状況

Ⅱ面　1号住居跡上面石製品出土状況

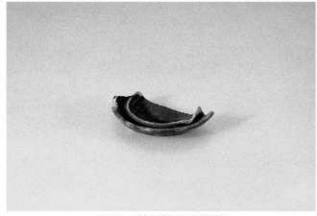
調査風景

調査風景

遺物写真



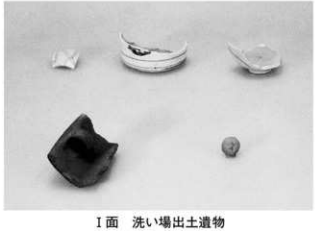
Ⅰ面　1号溝出土遺物



Ⅰ面　2号溝出土遺物

Ⅰ面　3号溝出土遺物

Ⅰ面　6号溝（左）・2号トレンチ出土遺物



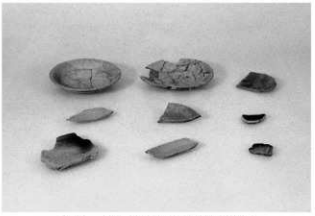
Ⅰ面　洗い場出土遺物

Ⅰ面　1号土坑出土遺物

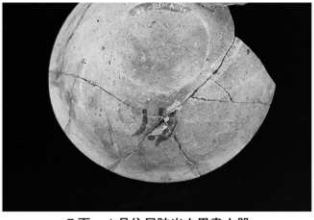
Ⅰ面　出土石製品

Ⅰ面　1号土坑出土木製品

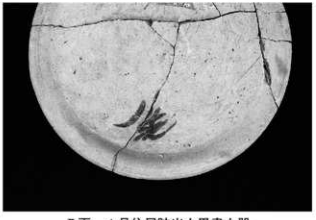
Ⅱ面　1号住居跡出土遺物（坏）



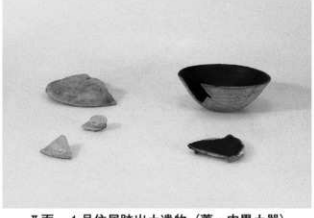
Ⅱ面　1号住居跡出土遺物（皿）



Ⅱ面　1号住居跡出土墨書土器



Ⅱ面　1号住居跡出土墨書土器



Ⅱ面　1号住居跡出土遺物（蓋・内黒土器）

Ⅱ面　1号住居跡出土遺物（甕）

Ⅱ面　1号住居跡出土遺物（甕）

Ⅱ面　2号住居跡出土遺物

Ⅱ面　3号住居跡出土遺物

Ⅱ面　3号住居跡出土墨書土器

Ⅱ面　F－35グリッド出土遺物

Ⅱ面　D・E－36～D・E・F－37グリッド出土遺物

Ⅱ面　D・E－36～D・E・F－37グリッド出土馬歯

Ⅱ面　1号住居跡上面出土石製品

Ⅱ面　1号住居跡上面出土石製品

Ⅱ面　1号住居跡カマド袖部の杭

報 告 書 抄 録

ふ り が な	こいかわいせき
書　　名	小井川遺跡Ⅳ
副 書 名	新山梨環状道路建設に伴う発掘調査報告書
巻　　次	（全１冊）
シ リ ー ズ 名	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第256集
著 者 名	依田幸浩・猪股一弘
編 集 機 関	山梨県埋蔵文化財センター
所 在 地	〒400－1508　山梨県甲府市下曽根町923　TEL 055－266－3016
発 行 者	山梨県教育委員会・山梨県土木部
発 行 日	2008年３月15日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 （新）	東経 （新）	調査機関	調査面積	調査原因
こいかわいせき 小井川遺跡	やまなしけん 山梨県 ちゅうおうし 中央市 おかたちない 布施地内	19387		36° 35′ 18″	138° 31′ 22″	2006年５月15日～ 2006年８月25日	約1,800㎡ （２面）	新山梨環状道路建設に関わる発掘調査

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
小井川遺跡	集落跡 溝状遺構	平安時代 近世・近代	竪穴住居跡 溝状遺構	古墳時代須恵器 平安時代土師器 陶磁器	

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　　第256集

2008年３月10日印刷

2008年３月15日発行

小井川遺跡Ⅳ

－新山梨環状道建設工事に伴う発掘調査報告書－

編　集　山梨県埋蔵文化財センター
〒400－1508　山梨県甲府市下曽根町923
TEL 055－266－3016

発　行　山梨県教育委員会
山梨県土木部

印　刷　株式会社　ヨネヤ